

上高田遺跡
木戸下遺跡
発掘調査報告書

1995

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

かみ たか だ
上 高 田 遺 跡
木 戸 下 遺 跡
発掘調査報告書

平成7年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、上高田遺跡・木戸下遺跡の調査結果をまとめたものです。

遺跡は山形県北西部の鶴ヶ島遊佐町に所在し、出羽富士「鳥海山」を仰ぎ見る肥沃で広大な庄内平野の北端近くに位置しています。

遊佐町は稻作を主とする農業の町であり、将来を見据えた大規模で近代的なほ場の「区画整備事業」ほかが継続して行われてまいりました。これらにかかわって、水田地帯に位置する多くの遺跡がこれまでにも数多く調査されてきたところです。

調査では、平安時代の初頭から後半にわたるまでの多量の遺物を包蔵する大きな河川跡や建物跡ほかが検出され、当時の集落や自然環境を考える上での貴重な資料が得られました。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた国民共有の貴重な財産です。私たちはこの文化財を大切に保護し、後世に引き継がなければなりません。また、一方では平和で快適なくらしができるような環境の整備なども等しく切望されるところです。近年高速道路やバイパス、あるいは農業基盤整備事業などの国県等事業が増加し、これらに伴って諸開発事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加しています。これらの調査は、開発事業促進と埋蔵文化財保護との観点から迅速かつ適切に進められることが求められ、両者の調和が今日的課題となっております。

そのため、県民および関係各位の要請に応えるべく職員一同一層の努力をいたす所存ですが、今後ともみなさまのご支援ご協力をお願い申し上げる次第です。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました地元をはじめとする関係各機関に対し心からの感謝を申し上げ、本書が文化財保護の啓蒙普及や学術研究、郷土研究や歴史教育活動などの一助となれば幸いに存じます。

平成7年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 木場 清耕

例　　言

- 1 本書は県営ほ場整備事業（月光川下流地区）に係る「上高田遺跡」「木戸下遺跡」の発掘報告書である。
- 2 調査は山形県教育委員会の委託により財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。

遺跡名	上高田遺跡 (AYZKT)	遺跡番号	県遺跡登録2080
所在地	山形県鮎海郡遊佐町大字富岡字上家ノ前		
調査期間	発掘調査 平成6年4月1日～平成7年3月31日		
	現地調査 平成6年7月11日～平成6年9月8日 38日間		
調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
発掘調査・資料整理担当者			
調査研究課長	佐々木 洋治		
主任調査研究員	尾形與典		
調査研究員	阿部明彦（現場主任）		
調査研究員	佐藤善春		
遺跡名	木戸下遺跡 (AYZKS)	遺跡番号	県遺跡登録2083
所在地	山形県鮎海郡遊佐町大字富岡字木戸下		
調査期間	発掘調査 平成6年4月1日～平成7年3月31日		
	現地調査 平成6年7月19日～平成6年7月29日 7日間		
調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
発掘調査・資料整理担当者			
調査研究課長	佐々木 洋治		
主任調査研究員	尾形與典		
主任調査研究員	佐藤庄一（現場主任）		
- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県庄内支庁経済部月光川土地改良事務所月光川土地改良区、遊佐町教育委員会など関係諸期間の協力を得た。ここに記して感謝申し上げる。
- 5 本書の作成・執筆は、上高田遺跡を阿部明彦・佐藤善春が、木戸下遺跡を佐藤庄一が各々担当した。編集は尾形與典、須賀井新人が担当し、全体について佐々木洋治が監修した。
- 6 現地調査における全体図等の平面図(1/40, 1/100)の作成は朝日航洋株式会社に業務を委託した。また、出土品の資料理化学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して報告を受けたものである。
- 7 出土遺物・調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次の通りである。

S K : 土壙 S D : 溝 S P : 柱穴・ビット S X : 性格不明 S G : 河川

R : 遺物 R P : 登録土器 S : 石 W : 木製品 M : 金属製品

Q : 石製品 F : 包含層

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。

3 報告書執筆の基準は下記の通りである。

(1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は真北を示している。

(2) グリッドの南北軸は真北方向に合わせた。

(3) 遺構実測図は、1/40・1/50・1/60・1/80・1/100・1/150で採録し、各々スケールを付した。

(4) 遺物実測図・拓影図は、上高田遺跡が1/4、木戸下遺跡が1/3を基準として採録し、各々スケールを付した。なお、実測図中のスクリーントーンは黒色処理を、黒ベタは須恵器を表している。

遺物図版については、1/3を基準とするが、一部に任意のものがある。

目 次

I 調査の経緯.....	1	5 まとめ.....	34
II 遺跡の立地と環境.....	1	IV 木戸下遺跡	
III 上高田遺跡跡		1 調査の概要.....	35
1 調査の概要.....	3	2 遺構の分布.....	36
2 遺跡の分布.....	4	3 遺構と遺物.....	36
3 遺構.....	4	4 まとめ.....	38
4 遺物.....	13		

挿 図

第1図 遺跡位置図.....	2	第13図 上高田遺跡遺物実測図(5).....	20
第2図 上高田遺跡調査概要図.....	3	第14図 上高田遺跡遺物実測図(6).....	21
第3図 上高田遺跡遺構配置図.....	7	第15図 上高田遺跡遺物実測図(7).....	22
第4図 上高田遺跡SG1河川跡実測図	8	第16図 上高田遺跡遺物実測図(8).....	23
第5図 上高田遺跡SG1・SG3河川跡実測図	9	第17図 上高田遺跡遺物実測図(9).....	24
第6図 上高田遺跡SG4・SG5・SX2実測図	10	第18図 上高田遺跡遺物実測図(10).....	25
第7図 上高田遺跡SG6河川跡実測図	11	第19図 上高田遺跡遺物実測図(11).....	26
第8図 上高田遺跡SG6河川跡遺物分布図	12	第20図 上高田遺跡遺物実測図(12).....	27
第9図 上高田遺跡遺物実測図(1).....	16	第21図 上高田遺跡遺物実測図(13).....	28
第10図 上高田遺跡遺物実測図(2).....	17	第22図 木戸下遺跡調査概要図	35
第11図 上高田遺跡遺物実測図(3).....	18	第23図 木戸下遺跡遺構平面図	37
第12図 上高田遺跡遺物実測図(4).....	19	第24図 木戸下遺跡遺物実測図	38

表

表1 上高田遺跡遺物観察表(1).....	29	表4 上高田遺跡遺物観察表(4).....	32
表2 上高田遺跡遺物観察表(2).....	30	表5 上高田遺跡遺物観察表(5).....	33
表3 上高田遺跡遺物観察表(3).....	31		

図 版

図版1 上高田遺跡SG 6 河川跡全景	図版10 上高田遺跡出土遺物(4)
図版2 上高田遺跡近景・調査風景	図版11 上高田遺跡出土遺物(5)
図版3 上高田遺跡遺構検出状況	図版12 上高田遺跡出土遺物(6)
図版4 上高田遺跡SG 3 河川跡	図版13 上高田遺跡出土遺物(7)
図版5 上高田遺跡SG 6 河川跡	図版14 上高田遺跡出土遺物(8)
図版6 上高田遺跡遺物出土状況	図版15 上高田遺跡出土遺物(9)
図版7 上高田遺跡出土遺物(1)	図版16 上高田遺跡出土遺物(10)
図版8 上高田遺跡出土遺物(2)	図版17 木戸下遺跡遺構検出状況
図版9 上高田遺跡出土遺物(3)	図版18 木戸下遺跡出土遺物

I 調査の経緯

遊佐町北西部の水田地帯に位置する富岡から北目地区の一帯には、庄内高瀬川や月光川の流れに沿って数多くの平安時代を主とする集落遺跡が点在している。これらの遺跡の立地基盤は、上記河川が形成した微高地（自然堤防）と理解でき、基本的に現在の集落が立地する状況とも共通する在り方と捉えられる。こうした微高地は、周囲より水捌けがよくしかも飲料水や農業用水が容易に確保できる等のより住みやすい条件を満たしてくれていたのであろう。その後の川筋の変化や後世の開発が進展する中で、集落は廃棄され、地形は少しづつ姿を変えて、現在に至ったと推察できる。そして、当時の集落は、辛うじて地中にその痕跡を止めてきたのである。一方、こうして残してきた遺跡群は、近年の継続的大規模な県営ほ場整備事業他の開発の波を直接かつ広範に受けるようになってきている。そのため、開発に先立って、遺跡の保存状況や範囲他の確認のための詳細分布調査を実施して記録による保存を目的とした緊急発掘調査が継続的に行われるようになったのである。今回の調査は、県営ほ場整備事業（月光川下流地区）を主原因といえる。平成3年と同4年に県教育委員会が行った詳細分布調査の結果を基に、関係機関との間で保存の可能性や施工方法等の検討を含めた調整が重ねられた。しかし、止むを得ず壊れると判断された部分については、記録保存を目的とした緊急発掘調査を山形県埋蔵文化財センターが主体となって実施する運びとなったのである。

II 遺跡の立地と環境

上高田遺跡と木戸下遺跡は、遊佐町の中心部から北西方向に約2km、もよりの富岡集落の南西方に位置している。北から北東方にかけて鳥海山の雄姿と緩やかに連なる稜線を見渡すことができ、西には日本海からの季節風を遮る庄内砂丘が迫っている。そして、南側は庄内平野の広大な景色がどこまでも続いているのである。2つの遺跡は隣接しており、上高田遺跡が東西200m、南北200m、木戸下遺跡は東西600m、南北200mの規模で広がっている。上高田遺跡の調査区付近の標高は8.5mを測り、全体として南東部に高く、北西方向で低くなる様子が観えた。

この2つの遺跡の周辺には、庄内高瀬川に沿って並ぶ形で石田・宅田・大坪遺跡、対岸に北目長田・櫛待・宮ノ下・道中遺跡というふうに、平安期を中心とする遺跡群が点在している（第1図参照）。これらの遺跡が立地する一帯は、庄内高瀬川や月光川など、北西に流下して日本海に注ぐ中小の河川が形成した冲積平野である。かつては自然堤防や後背湿地がより明確な形で存在し、河川の氾濫の繰り返しによって地形が少しづつ変化していくものと推察できる。今回の上高田遺跡の調査で検出された河川跡やそこに見られる泥炭層・砂礫層他の堆積物は、これらのことと密接に関連するものだった。そして、人々が地形の変化に応じて居住地域を移動し、あるいは拡大させていったことが、数多くの遺跡群として今日に残る結果につながったと考えられる。



- 1: 上高田遺跡 2: 木戸下遺跡 3: 北目長田遺跡 4: 繩待遺跡 5: 堂田遺跡
- 6: 筋田遺跡 7: 野瀬遺跡 8: 中田浦遺跡 9: 地蔵田遺跡 10: 宮ノ下遺跡
- 11: 通中A・B遺跡 12: 石田遺跡 13: 宅田遺跡 14: 大坪遺跡 15: 三田遺跡
- 16: 袋冷遺跡 17: 木原遺跡 18: 古屋敷遺跡 19: 小深田遺跡 20: サナミ坂遺跡
- 21: 剣竜神社西墓 22: 剑竜神社東墓

(国土地理院発行 2万5千分の1の地形図「吹浦」を使用)

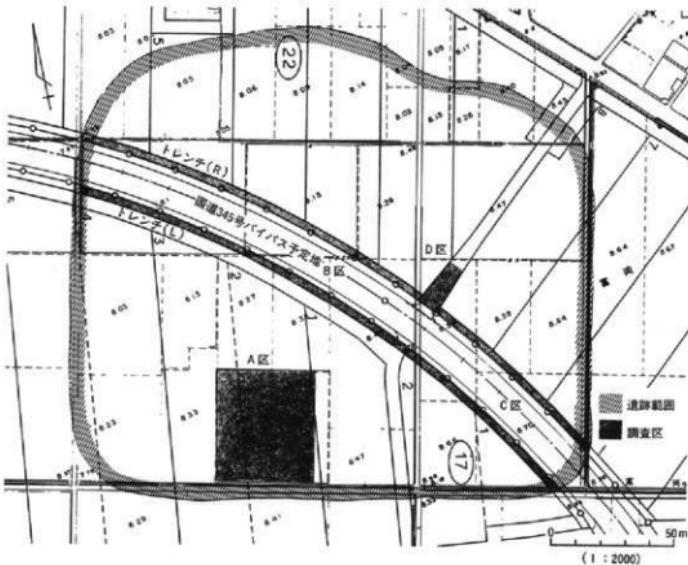
第1図 遺跡位置図 (1 : 25000)

III 上高田遺跡

1 調査の概要

今回の調査は、上高田遺跡域の3,000m²を主な調査対象区として実施したものである。このうち南西部分が1,800m²(40m×45m)、国道345号線バイパス予定地に並行する排水路部分が1,200m²である。第2図で示すとおり、調査区のうち、南西部分をA区、排水路部分の北側をB区、南側をC区、さらにバイパスと現国道の取り付け道路予定地に係る部分をD区と設定して調査に入った。以下、調査の経過を略記しておく。

平成6年7月11日、現地事務所に器材を搬入し、調査区を設定した。7月13日と翌14日に重機を導入してA区の表土の除去作業を行い、B～D区についても、7月19日に同様の作業を行った。表土を除去したところから直ちに遺構検出に向けての面整理を開始し、A区では7月15日まで大方の遺構を検出した。その後、B～D区での遺構検出と精査を中心に行き、検出した遺構については、遺物の出土状況や完掘状況、土層の堆積状況を記録するための平面図・断面図の作成と写真撮影を行った。そのうちB区は7月29日に調査を完了し、8月に入つてからはC区とD区の遺構精査が主体となった。8月13日から8月21日まで作業を休止し、再開した8月22日からはD区のSG6完掘の掘り下げ作業を継続した。終盤、豪雨で調査区が冠水し、排水作業のために調査が難航したが、当初の予定どおり9月1日に現地説明会を実施して、9月8日にはすべての調査を完了した。



2 遺構の分布

検出した遺構の配置状況は、第3図に示した通りである。A区においては、畦畔の明瞭に残る10数枚の水田跡が調査区の全面から検出された。この水田跡は近世のものと考えられる。本遺跡の主体である平安期の集落跡に関係する遺構は大方破壊されていたが、溝跡やピットが畦畔上や田面の底に辛うじて残されていた。

一方B～D区では、SG1～SG6と登録された河川跡が検出された。土層の堆積状況や川幅、深さ等の観察から同一の河川であると判断でき、第3図に示したような河道が推定される。河川跡は、川幅10～15m、深さ1.5m程度の規模で、所々で蛇行を繰り返しながら、南東から北西方向に流下していたと考えられる。川底部分に見られる砂礫層、中間層の泥炭（植物腐植土）や混入した火山灰等からは、川跡が埋没していく時間的経過や水流の変化が推察できる。さらに、出土した遺物の分布状況からも、長い年月にわたって遺物の流入と堆積を繰り返しながら川跡が埋没していく様子が窺えた。

SG6川跡からは、道路跡と考えられる杭列も検出された。ほぼ川跡が埋まった段階での土木工事の跡と思われるが、軟弱な地盤を改良するために土を入れ替えて、長さ1mほどの杭を土留めのために道路の両側に打ち込んだものである。道幅は2m程で、河川の流れる方向とほぼ直角に、河川を横断するように造られていた。

C区のトレンチL南端では、川跡とは異なる遺構S X 2が検出された。掘り下げた段階で遺構内にSP7～SK12とした遺構が確認され、須恵器とあかやき土器が出土した。

3 遺構

SG1河川跡（第4図・第5図上）

C区のトレンチLとトレンチRを137グリッド付近で横断する河川跡で、川幅は約14m、地表面から川底までは1.2mを測る。南西から北東方に向けて緩く湾曲している河道が推定される。トレンチに対応して、トレンチLにかかる部分をSG1L、トレンチRにかかる部分をSG1Rと呼称し、掘り下げた水際の部分を南北に分けて表示した。SG1Lでは、第4図の土層断面図で示すように、河川跡の南北ともほぼ同じような土層の堆積状況が認められる。川底部分が砂質シルトで、その上に黒色あるいは黒褐色の植物腐植土の層がある。この層は、多量の炭化物・腐植した植物が水分を含んだ状態で堆積していて、下の方ほど腐植の度合いが進んでいた。また、遺物の出土量も多く、SG1L北では水際の底面を中心に須恵器やあかやき土器が出土し、須恵器の坏はすべて箇切りであった。SG1L南では、土器はほとんど出土しなかったが、土錐が8点程まとまって出土している（第5図参照）。この河川で漁撈が営まれていたこと示すものとして注目される。なお、SG1Rは、SG1Lの下流にあたると推定される。中間層に植物腐植土が含まれるなど、土層の堆積状況に類似した点が多い。ただし、その下層にあたる砂質シルトの層にSG1Lには見られなかった火山灰の混入が認められた。SG1R南ではごく少量であったが、SG1R北では層全体に含まれていた。また、遺物はSG1R南・北ともごくわずかしか出土せず、SG1Lとは異なった様相を呈していると判断される。

SG 3 河川跡（第5図下）

SG 1 の下流にあたる河川跡で、トレンチ R の 139R グリッドで検出された。トレンチ R に並行して走る河道跡が推定される。SG 1 と SG 3 の間では河道が北西方に大きく湾曲しているのであろう（第3図参照）。SG 3 は、左岸にあたる部分のみが検出されているので、川幅を確定することはできないが、SG 1 や後述の SG 6 の川幅から考えると概ね 15m 幅と考えられる。地表面から川底までの深さは 1.2m 程度であった。土層の断面を観察すると、中間に植物腐植土の層が存在し、SG 1 と同様の堆積状況を示していた。しかし、SG 1 では植物腐植土の下層に混入していた火山灰が、ここでは植物腐植土の上層に含まれている。おそらく降灰後にある時間の間隔をもって、より上流や周囲より流れ込んで、河道内に堆積したものと思われる。植物腐植土の中には、直径 10cm 程度の石や土器片、木製品等が含まれており、一度に多量の遺物が河川に流入した形跡も認められた。遺物の出土状況をみても、植物腐植土の層位で須恵器の壺や壺、黒色土器の高台付壺、あかやき土器の壺等がまとまって出土している。

SG 6 河川跡（第7図・第8図）

SG 1、SG 3 の下流部にあたる河川跡で、トレンチ R の 140R グリッドから取り付け道路予定地にかかるまでの地点に検出された。左岸は SG 3 から連続しており、川幅は約 14m、地表面から川底までは最深部で 1.8m を各測る。したがって、南から北方へ向かって流下していたと考えられる。その後、中央に土層観察のためのベルトを残し、約 10m の区間で川底まで掘り下げた。第7図で示すように、中央ベルトの両側および北側の 3 地点の土層の堆積状況から、両者共に植物腐植土層と火山灰を含む層が確認できる。火山灰は、植物腐植土の下層にブロック状のものが多く含まれているが、植物腐植土の直上あるいは同一レベルにも混入が認められた。分析の結果、これらの火山灰は、いずれも十和田 a テフラに由来するものであるとの結果がでている。SG 3、後述の SG 4 で採取した火山灰についても同様の結果と判断される（分析：パリノ・サーヴェイ株式会社）。このことは、SG 3 でも述べたように、降灰後に時間をおいて上流や周囲から火山灰が繰り返し流入したことを示すものであると考えられた。特に、植物腐植土の下層では、洪水により大量の土器や木製品、部材等が流れこんだ形跡が窺える。川底部分の細砂に粗砂や小石が混在する層は、河川が本来の機能を果たしていた時期のものと考えられる。それが、洪水や氾濫によって河道や流速、あるいは水量等が少しずつ変化し、河川としての機能が低下していくと推測される。SG 6 からは、須恵器・あかやき土器・黒色土器等の土器類や箸・曲物等の木製品が多数出土している。出土状況を見ると、河川の流路に沿って川底部分の中央に遺物の集中が認められる。また、水際に注目すると、右岸よりも左岸側に遺物が多く出土していることが注目される（第8図上参照）。このことは、前述の SG 1 L や SG 3 における遺物出土状況とも考え合わせると、河川跡の左岸付近に古代の集落が存在していた可能性を示唆するものと推測させた。また、河川が埋没していく過程を大きく 3 段階に分け、出土遺物を各々に対応させて分類すると第8図下のような結果となる。I 期は、この河川

が本来の機能を果たしていた時期とみなせ、大量の土器や木製品が自然木等とともに流れこんできた時期である。したがって、I期の中でも、最下層の砂地から出土した遺物とそれよりやや上層の炭化物や植物を大量に含んだ層から出土した遺物では時期差が生じていると考えられる。最下層からは、須恵器の壺および高台付壺類がR P等で登録したもの24点が出土している。底部切り離しは、すべて回転鋸切りによるものであった。その中で底部に墨書きを持つものが12点あり、「口」の墨書き文字を有するものが6点と多数を占めた。その上層からは、木製品が集中的に出土している。SG 6でRW登録した木製品48点のうち36点がこの層からの出土である。器種別では曲物が最も多く6割を越える。その他に蓋や椀、皿、部材、さらに登録外の箸や斎申等の小物多數が良好な保存状態で出土している。土器では、須恵器に変わってあかやき土器の壺が多くなり、出土地点も河川の中央から左岸水際の方に移行している。II期は、植物腐植土が堆積している層を含んでいる。河川の流速が衰え淀んでいった時期で、沼地に近い状態であったといえるかもしれない。この段階での遺物は、出土地点が左岸水際に集中しており、付近に生活していた人々によって廃棄された可能性が高い。出土した遺物は、あかやき土器の壺が大半で、I期のものと比べると重みを生じているものが多い。黒色土器の高台付壺も、登録したもので6点出土している。III期は、河川がほぼ埋没した時期である。この層で出土した遺物は、あかやき土器の同型の皿が21点、同じくあかやき土器の壺等である。明らかにI・II期の遺物とは様相を異にしている。鰐口については、出土地点や他の遺物との時期関係からみて、河川埋没後に施工された杭列を持つ道路遺構に関連する遺物と考えられる。

SG 4・SG 5 河川跡（第6図）

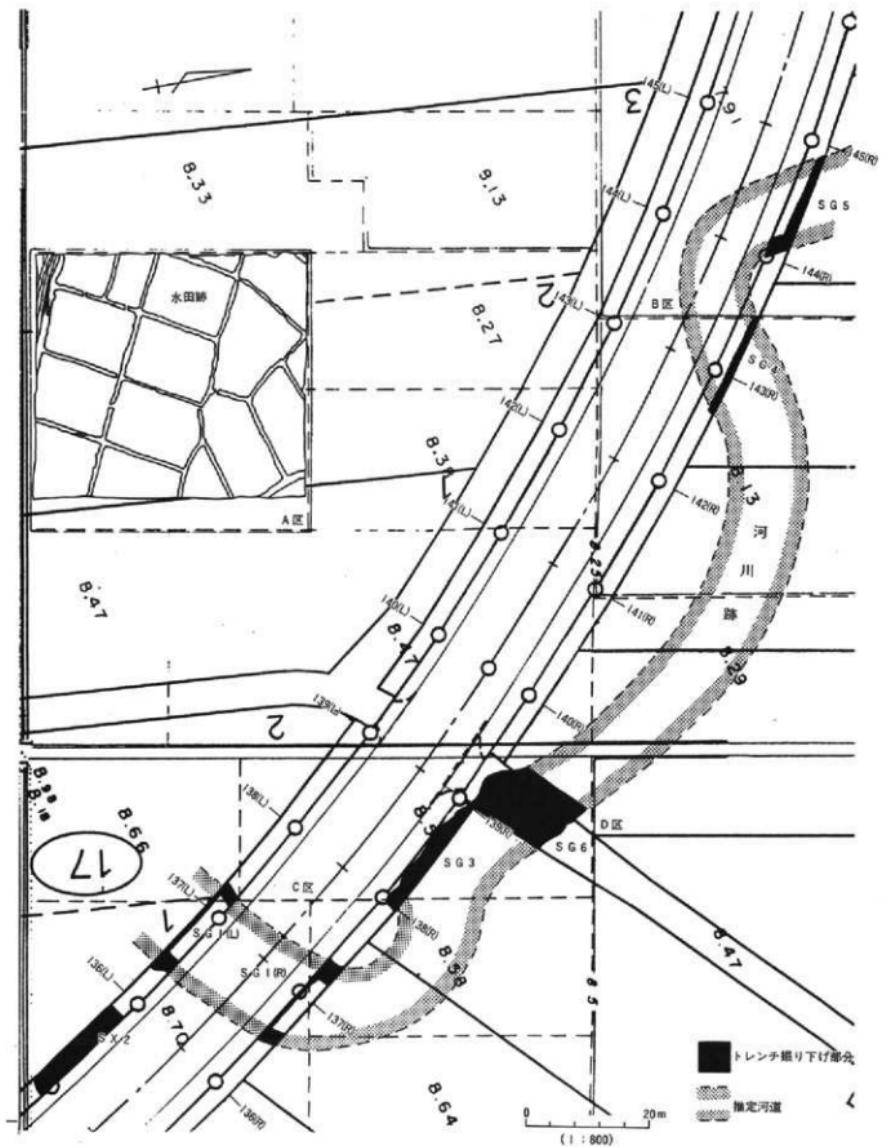
SG 6からさらに北西方向に80mほど下流部にあたる河川跡で、B区の143R～145Rグリッド地点で蛇行しながらトレンチRと交差していると推定される（第3図参照）。川幅は15m程度である。遺物はほとんど出土していない。

SX 2（第6図下）

C区のトレンチL南端の136Lグリッドで検出された遺構で、土器片が798点（あかやき土器700点）出土している。遺構を掘り下げるとき、SP 7・SD 8・SK 9・SD 10・SK 12の遺構が検出されたが、性格は不明である。

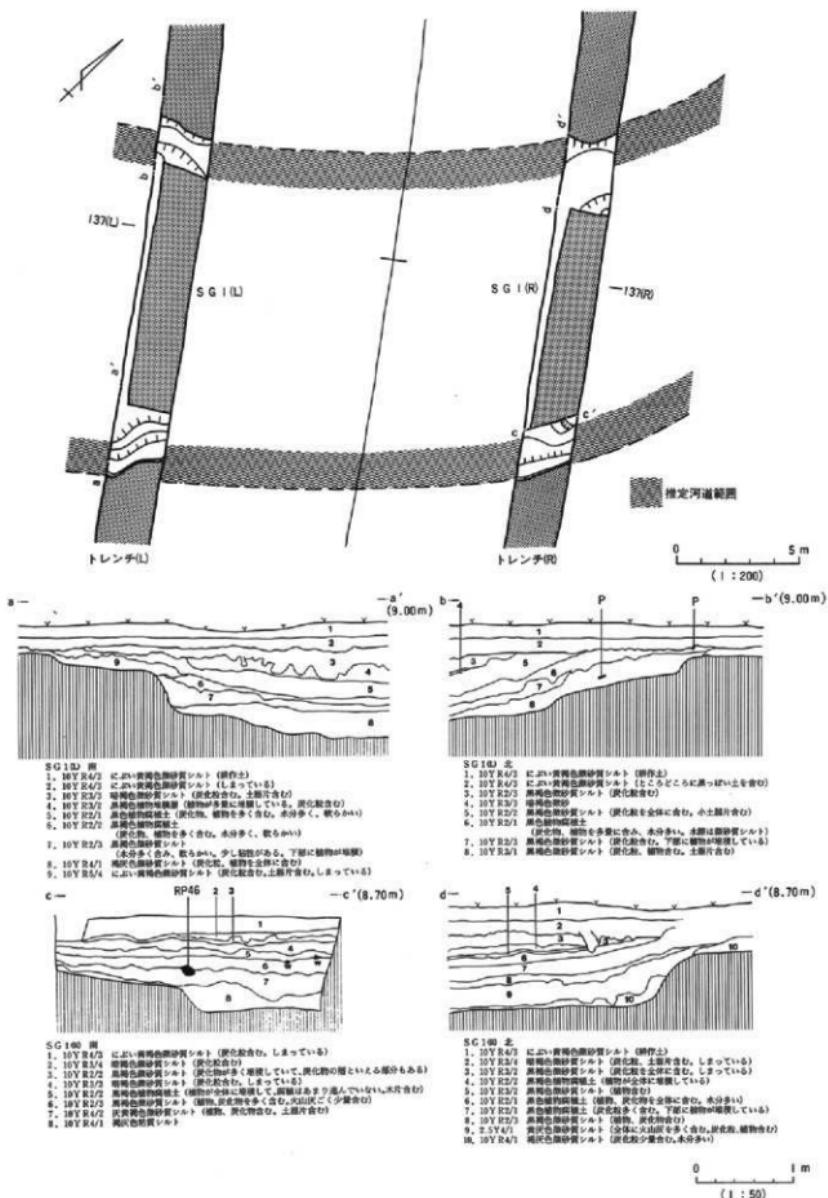
A区水田跡（第3図）

調査区の全面に明瞭な畦畔をともなって検出された17枚の水田跡である。畦畔上には配水のために施したと思われる溝跡（水口）も7カ所で確認された。不整形なものもあるが、1枚の水田の面積は1.2a程度である。地表面から遺構検出面までの深さは20～30cmと浅く、本遺跡の主体であるべき平安期の遺構は、この水田の造成によって、あるいはそれ以前に大方破壊されてしまったようである。出土遺物も、A区全体で877点（須恵器295、あかやき土器539、黒色土器36、製塙土器7）と少なく、ほとんどが小片で磨耗している。辛うじて調査区西端や畦畔上および田面の底部に溝跡やビットが検出され、調査区西端のSD 13からは墨書きを有する須恵器の蓋が出土したにとどまっている。

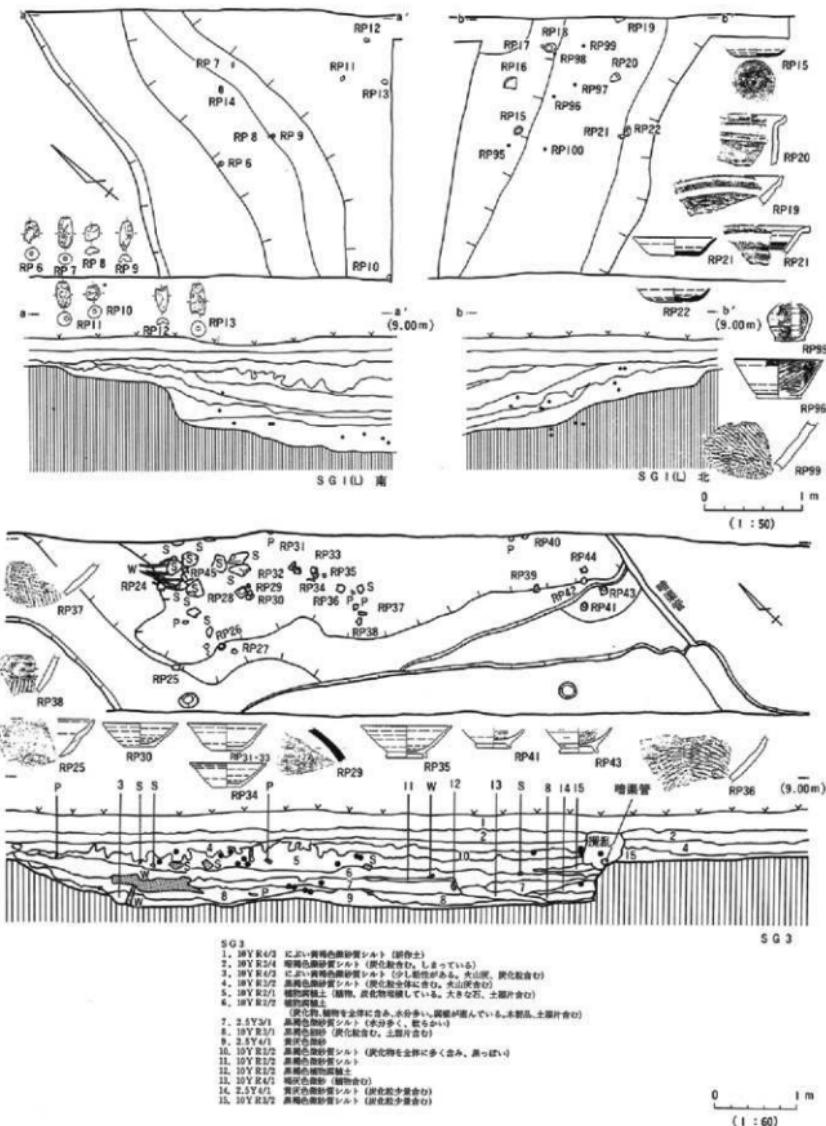


第3図 上高田遺跡遺構配置図（1:800）

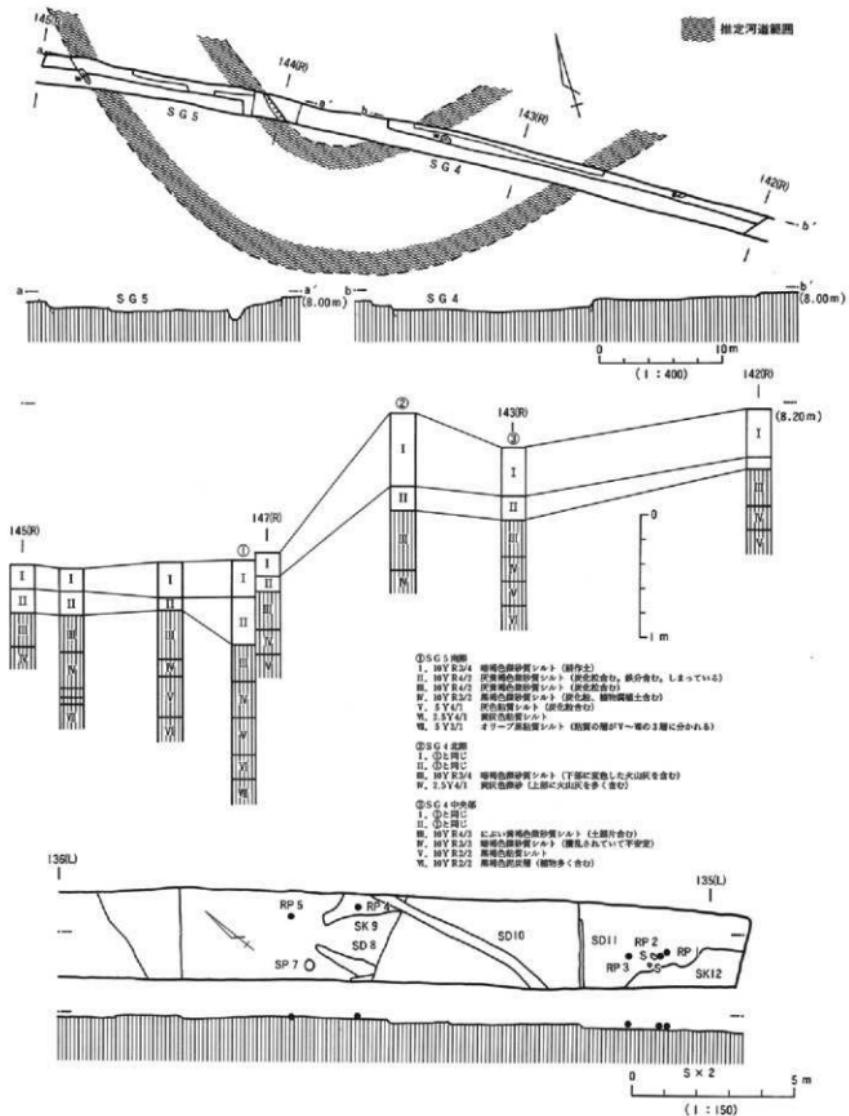
III 上高田遺跡



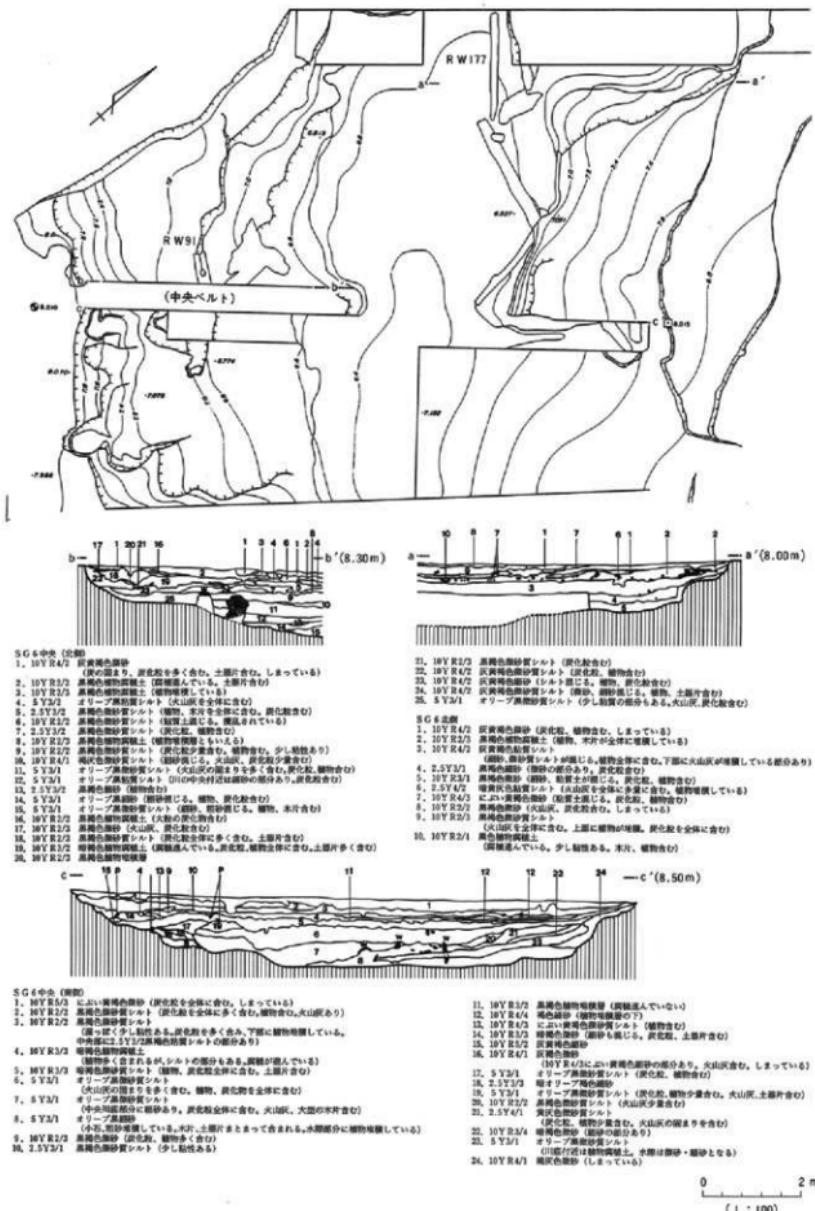
第4図 SG 1河川跡実測図



第5図 SG1・SG3河川跡実測図

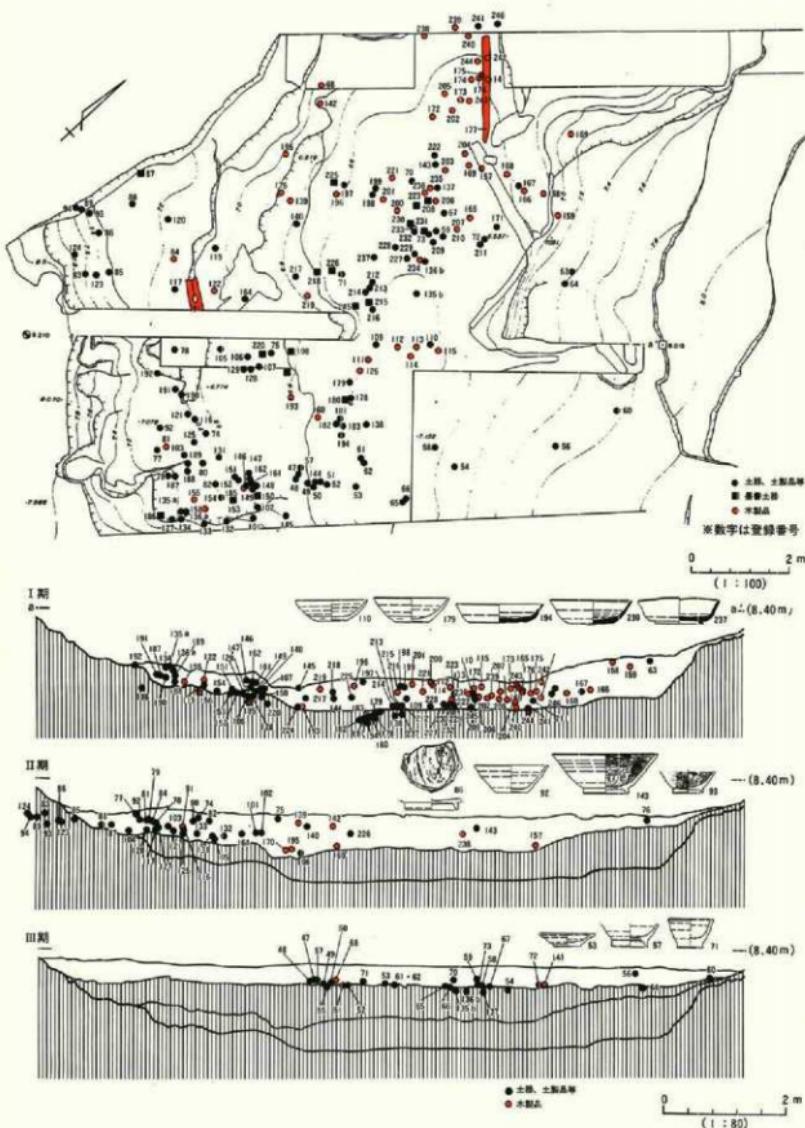


第6図 SG4・SG5・SX2実測図



第7図 SG 6 河川跡実測図

III 上高田遺跡



第8図 SG8河川跡遺物分布図

4 遺物

本遺跡からはSG6川跡を中心として須恵器・あかやき土器・黒色土器などの主に平安時代に帰属する土器群と、曲物・挽物容器・建築部材・斎串・箸などの木製品、および中近世の所産と推測される鰐口1点、その他土鍬・磁石などの土石製品類若干が出土している。総量的には整理用のコンテナにして33箱相当分ほどと計量された。以下に、これらの遺物について種別器種毎に概略を記すが、量的に多い土器群他については、SG6川跡での堆積層序（第8図）を目安として下層から上層にかけての様相として説明しよう。なお、遺物個々については章末に観察表（表1～5）を附したので参考されたい。

SG6川跡出土土器（第11～21図）

供膳器（坏類底部）に限った集計から須恵器では糸切りと箆切りが各30～40%で拮抗し、あかやき土器（350点）で糸切りが97%、箆切りのもの3%弱、黒色土器で（64点全て糸切り）、無台の平底形態73%、高台付27%の数値が得られた。しかし、これは層序毎や垂直分布等の考慮のない外観的値であることを断っておく。これらの土器群の特徴は「箆切り無調整の須恵器坏の存在、底径／口径の比率から得られる漸移的な底径の縮小化傾向が迫ることのできるあかやき土器坏類、加えて若干例ながら回転箆削り再調整を施す一群の存在、そして最上層のあかやき土器終末期と捉えられる柱状高台化の傾向を呈する小形皿類や台付坏の存在」等に求められ、帰属年代にして西暦800年前後から900年代末頃までの約200年間に亘る土器変遷と捉えられる。以下に下層（I期）から中層（II期）、および上層（III期）の順に類別して概略を述べていく。

I期の土器群

川跡を埋積した土層7・8層、20～24層を中心に検出された土器群で、最下層の河床面部分に限ると箆切りの須恵器坏（RP229他）、同高台付坏（RP178・208・228）あかやき土器で回転箆削り再調整の認められる坏（179・227）、同無調整の坏（RP150・152・153）などのまとまりある一群として指摘できる。細部の特徴を説明する紙数的余裕が無いため、帰属時期等の根拠を明確にできないが、須恵器坏類での形態的特徴は8世紀後葉から9世紀初頭代を示すと考えて大過ない。あかやき土器坏の再調整が認められる一群もこれらと共に併せて捉えられる状況は重要である。仮にこれらをIa期として以下のIb期のものと区別しておく。なお、須恵器の坏類では「口」を中心に「官」「利」「富」などの墨書文字が認められたことを付記しておこう。

Ib期の土器群

組成的に須恵器の各器種をほとんど含まないなどの偏りがあると判断でき、ここで図示し得た土器群はあかやき土器の坏類を中心に同鉢・鍋・長胴壺のほか黑色土器の高台付坏（底部破片1点）若干などに限られる状況となっている。しかし、あかやき土器坏は、体部の外傾が内窓気味の直線的で、形態的に遊台形を基本とした一群（底径／口径の指數で43%内外と38%内外のものが見られ、前者が多い）が主体と捉えられ、II期の体部外反傾向を示すそれとは明らかに異なる様相と区別される。これらあかやき土器坏の底部や体部には

「十」・「世」・「令」・「主」・「宅」などのやや大きく明瞭に記される I a 期例とは明らかに識別できる墨書文字が判読されて注目される。なお、本報告中に掲載し得た曲物ほか大方の木製品はこれらの I b 期の土器群に伴って検出されたものであることを付記しておく。年代とすれば 9 世紀の第 2 四半期から第 3 四半期にかかる頃と推定されるが、須恵器の供膳器他が不明のため明確に決し難い。しいて類例を上げれば、近接する北目長田遺跡での「組成 3」に近い状況かと推察される。

II 期の土器群

川跡の埋積土、主として 4 ～ 6 層を中心として検出された土器群で、供膳器では主体的なあかやき土器坏と量的なまとまりを見せる黒色土器坏（無台・高台付）、須恵器では広口壺（R P89）、その他 K-90 段階の灰釉陶器碗（R P86）などに年代的特徴が覗えた。

あかやき土器坏は形態的に「体部上半からやや強く外反して開く口縁部」等のありがたに特徴の一端が強く窺える一群で、一方では「器高の低下傾向」や「歪み度合いの増大」、「ロクロ整形痕の顕在化」なども特徴的要素と指摘できるものである。総体として製品の量産・粗悪化傾向を反映すると認識でき、土器の生産や供給に係わる当時の社会的背景にも強く係わった現象と捉えられよう。煮炊具の様相は資料的限界から不詳ながら、鍋・壺（R P127）類の造作から形態的丸形化、技法の簡略化や粗雑化等傾向が同時進行的と認められる。黒色土器は内黒と両黒の 2 者があり、両黒はごく僅かであった。器種的には蓋（第16 図 6・7）と坏、椀類の 2 器種である。内黒坏では無台と高台付坏の別が認められ、量的に後者の高台付坏タイプが大半を占めていた。全体とすれば無台の形態が先行すると見られることから、ここでの無台タイプ（R P78）は客体として捉えられよう。年代として、9 世紀第 3 四半期から 9 世紀第 4 四半期にかかる様相かと捉えられる由縁でもある。この段階での内黒高台付坏には法量的に口径 17cm 前後の大型と、同 14cm 内外の小型器種が認められ、蓋は法量（口径 15cm 内外）から小型のものに組合わさったと推測される。

その他では寛唇調整を施すものの黒色化処理のなれない椀類（第16図 21・22）や、三ヶ月高台・釉の刷毛塗り・重ね焼きなどの特徴を示す灰釉陶器碗（第13図 27・R P86）などもこの II 期の層位中と認められたものである。

III 期の土器群

S G 6 の埋積土、2・3 層の最底面に良好なまとまりとして検出できた土器群で、本川跡出土土器群の中では最も時期的に新しいものである。器種では糸切り無調整の皿（R P47 他）が主体で、これに高台付坏（R P57 他）や小形の口縁直上型坏（R P71）、鍋（R P60）などが認められた。従来の下長橋遺跡や境興野遺跡例に較べると、下長橋遺跡の V 期（地鎮具の土器組成）と類別された土器群に最も近いと判断される。そこでは虎渓山 1 号窯式の灰釉陶器が伴うとされており、その限りでは 10 世紀第 3 四半期以降、10 世紀末葉頃までの年代観が与えられる。なお、皿類はさほど柱状高台化が進んでいるとは見えないが、焼成段階での底部亀裂を多くのもので認めたことが注視された。一方、境興野遺跡や下長橋遺跡 S X1105 に見る柱状高台皿や、足高高台皿類の組成が認められない事実も気懸かりとなる。

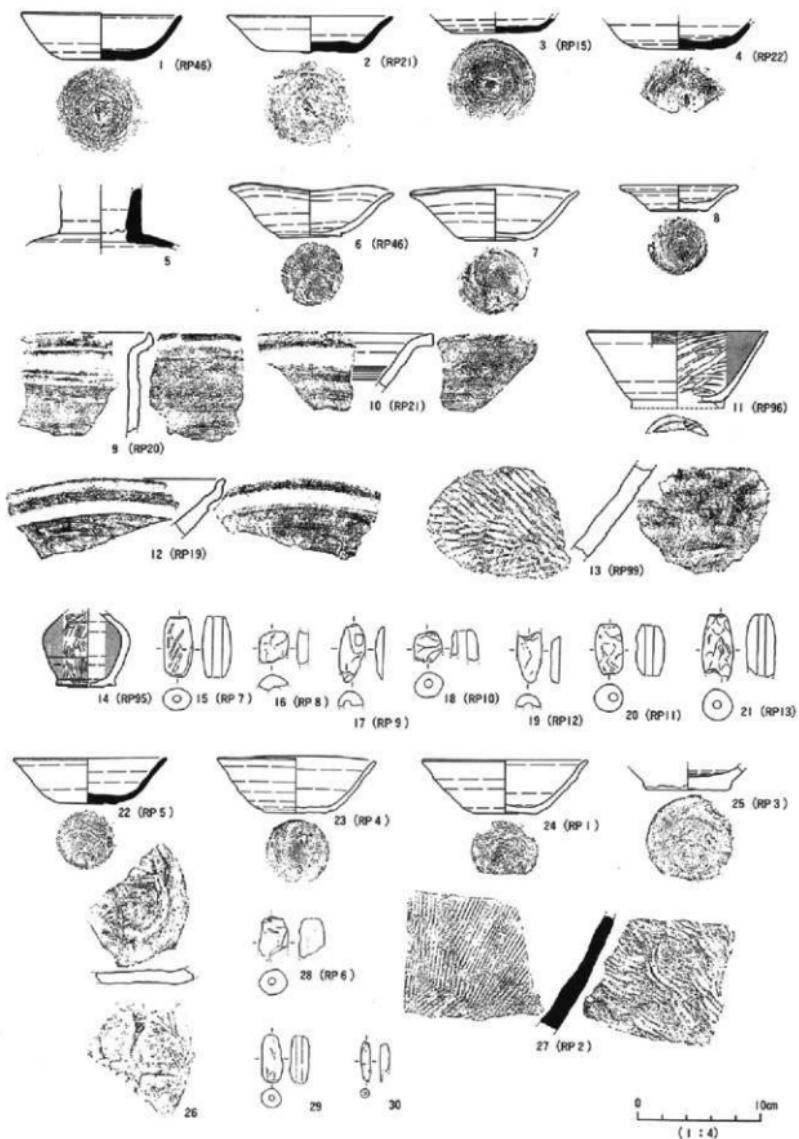
出土木製品（第18～21図）

木製品は既に述べたようにその大半がSG6川跡の下層（I b期）から出土したもので、種別・器種では、蓋・盤・皿・椀・鉢・壺などの挽物容器と大小の曲物類、および籠・棒状具・握りや鞘の類、箸、呪具等斎串、組物や建物部材等多彩であり、かつ量的にもまとまりが認められた。以下に容器類を中心として個別に説明していく。

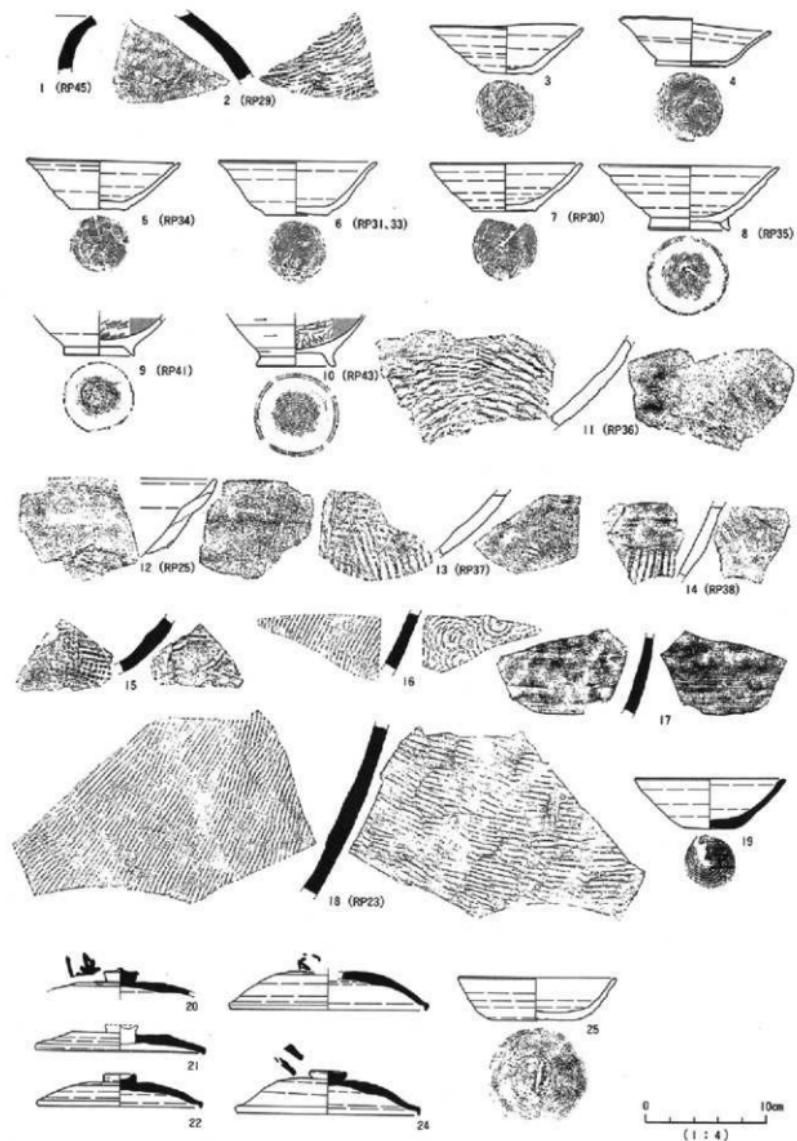
蓋（18-1）は土器の形態を忠実に写した内外面黒漆塗りの優品で、口径17cmの大形品である。材は樹種同定の結果「ケヤキ」と判定された。これに組み合う坏身の形態は不明ながら、あるいは法量や漆塗りの形態から推して18-10のような漆塗りの台付椀が想定される。盤は口縁の立上がりの緩いもので、半欠品ながら口径は14.8cm程と推計される。皿（18-3～6・8・9）は厚手の台部から口縁が直線的に緩い角度で伸び出す類（3～5）と、体部弯曲で口縁の立上がる形態（6・8）の2種が認められた。材はいずれも木目等から判断して広葉樹と考えられる。椀（7）はロクロにより分厚い台部を挽出すもので、見込み部の割りが浅いために実容積がごく小さなものとなっていた。材は不詳ながら木目から針葉樹と判断される。鉢は口縁端部を欠くが、薄手に仕上げられる内外黒漆塗りの大形品で、底部は平底である。壺は外面黒漆塗りの小形品で、両黒の土器壺等を写したものと推測された。

曲物（第19・20図）は30点程出土したが、その多く（2/3）は側板から剝離した天板や底板類である。法量的には口径14cm内外（19-2）と同15cm前後（19-3）のものが多く見られ、組合う弁当箱的な器種と用途が推測される。なお、前記19-2・3の例は発掘調査時に組合ったままの状態で出土した希有な例であった。その他の同様な法量ののものもこれと同様に組合う中小形の日常容器、あるいは携帯容器として用いられたものだろう。技術的な面では、天板・底板と側板の接合に木釘を用いる例（1～3、5・6他）、あるいは桜皮等の樹皮を側板にまで終める例（19-4・6）の2種が識別される。後者はこれまであまり注意されたことのない数少ない手法として注目される。また、天板、底板は手斧で削られる等の調整痕が大半に認められ（19-9・14）、一部のものでは直線的な刃傷痕を斜行で不整に止めるもの等も認められた（19-4）。籠（20-11）はこの時期によく見られる形態で、握り部を両側から削り出して作出し、先端は使用痕と考えられる摩滅痕が見られた。また、鞘（20-12）や刃物の握り等柄（20-13）からは、やや格の高い小刀類が存在したと推測される。その他、片方や両端のとがった棒状の工具類（20-15～17）、あるいは先端を丸く仕上げて擦状とした例（第19-14）など、用途等不明な一群も多く検出された。また、祭りに用いられた大小の斎串類（21-18～26）や、組物と考えられる硬質の材に幾つものホゾ穴を穿つ部材（21-27）や建物そのものの梁・朽材等と考えられる一群（20-28～30・32）などは当時の建物上部の構造を窺う上で貴重な資料となるだろう。

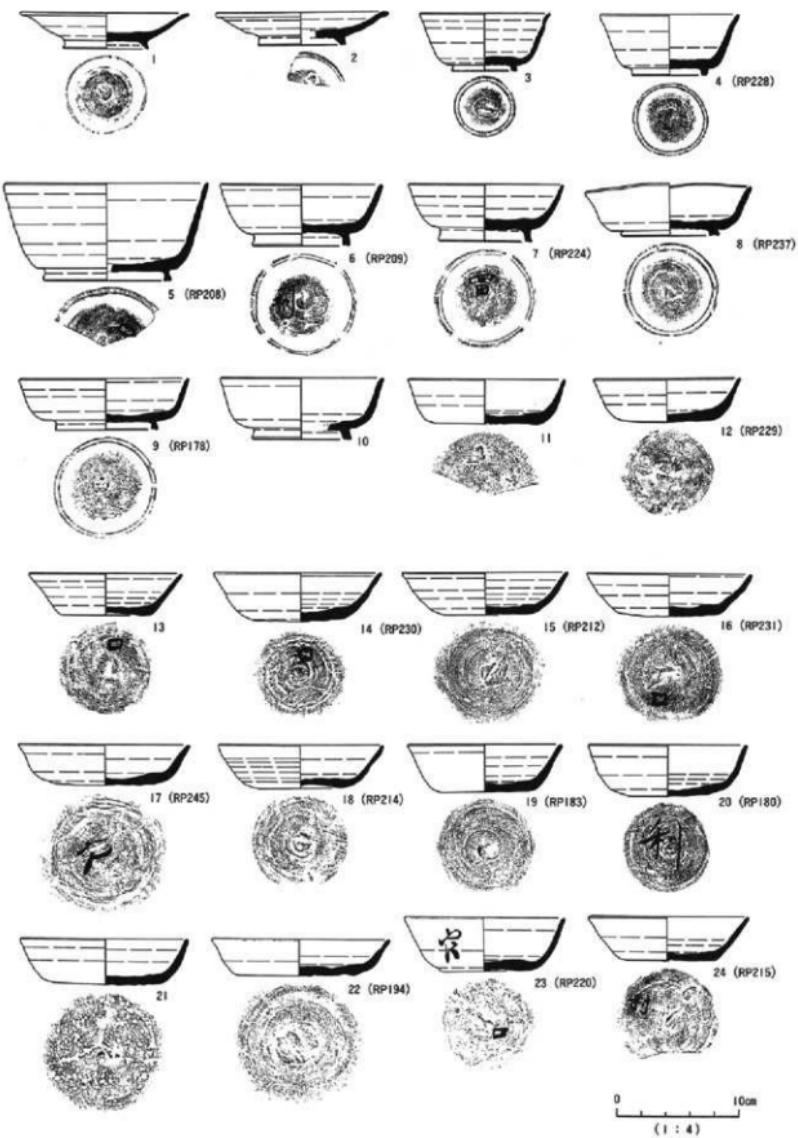
土・石・金属製品では、SG1の川底付近から集中的にまとめて出土した土鍤（9-15～21）や、SX2から出土した土製紡錘車（16-29）、SG1の主としてIII期に関連する火山岩製の大型磁石（16-35・32）、あるいは道路遺構との関連で捉えられる中近世に帰属する鰐口（17-40）なども詳述不能ながら興味の持たれる遺物として特筆される。



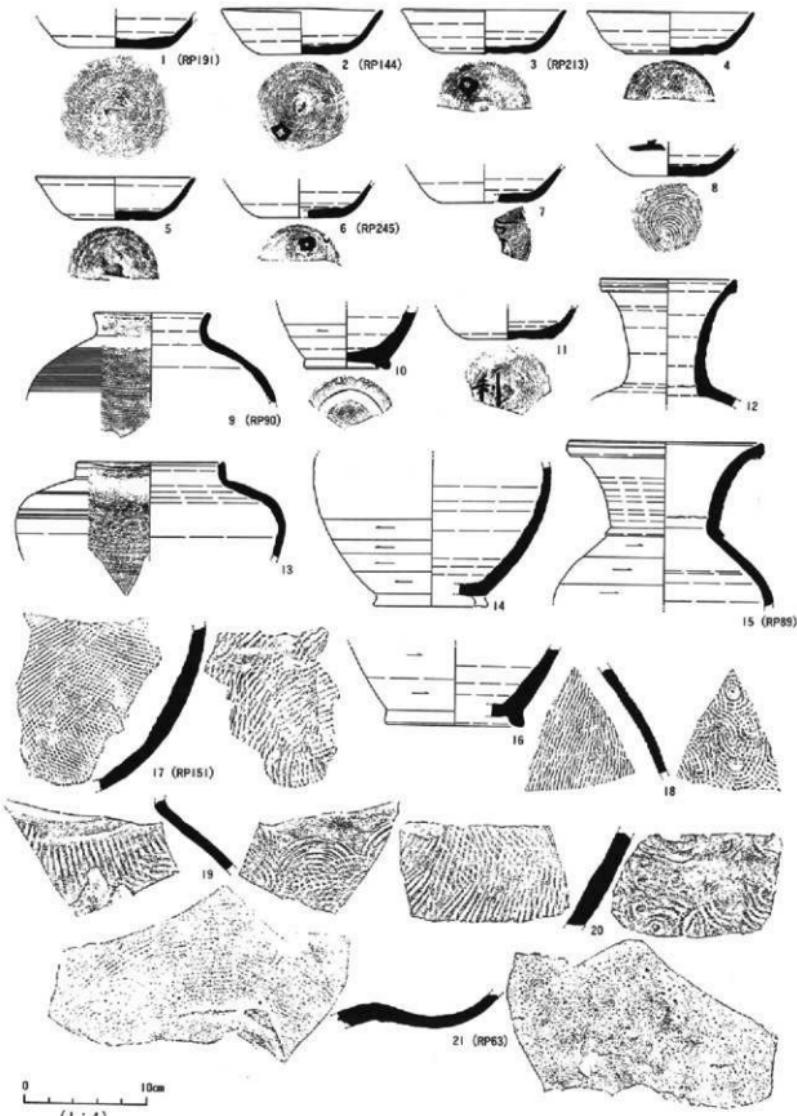
第9図 遺物実測図(1)



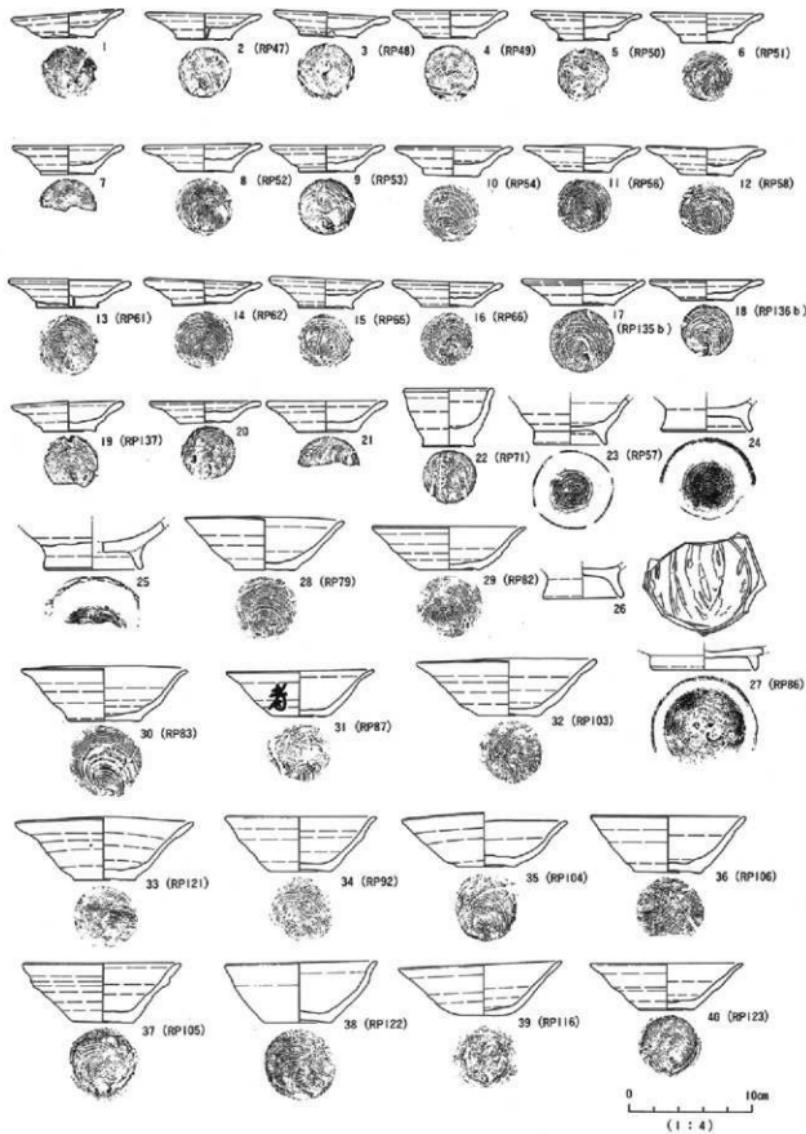
第10図 遺物実測図(2)



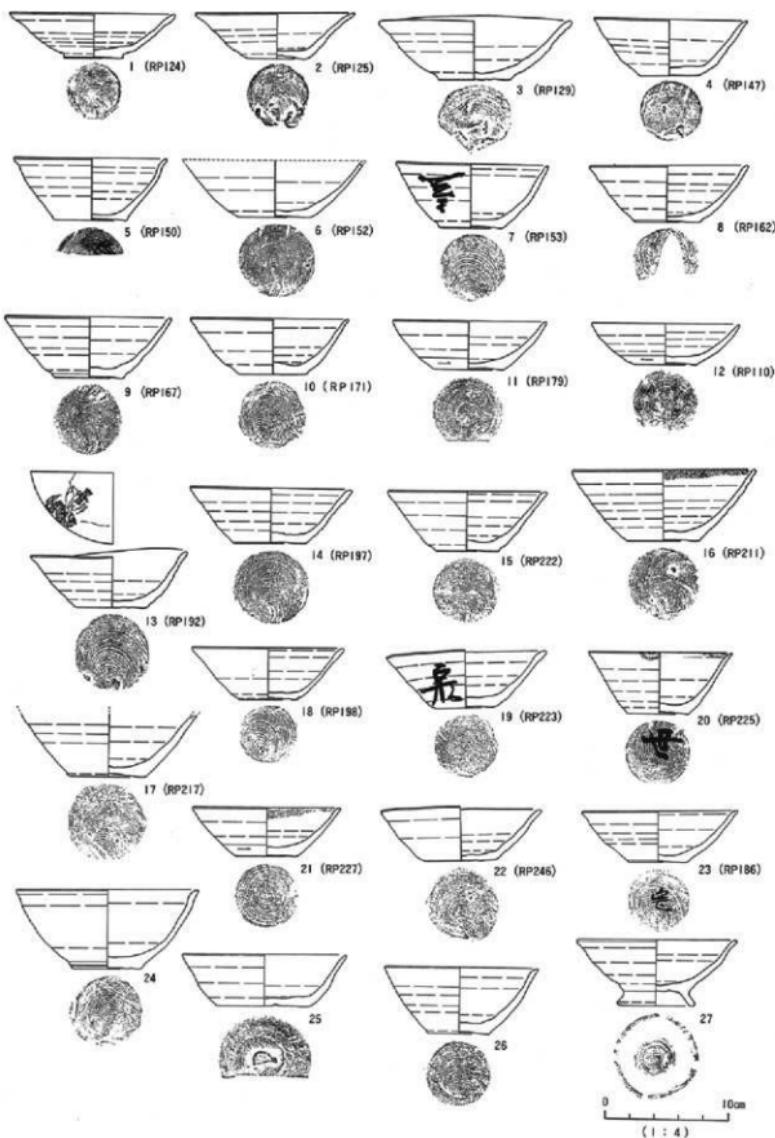
第11図 遺物実測図(3)



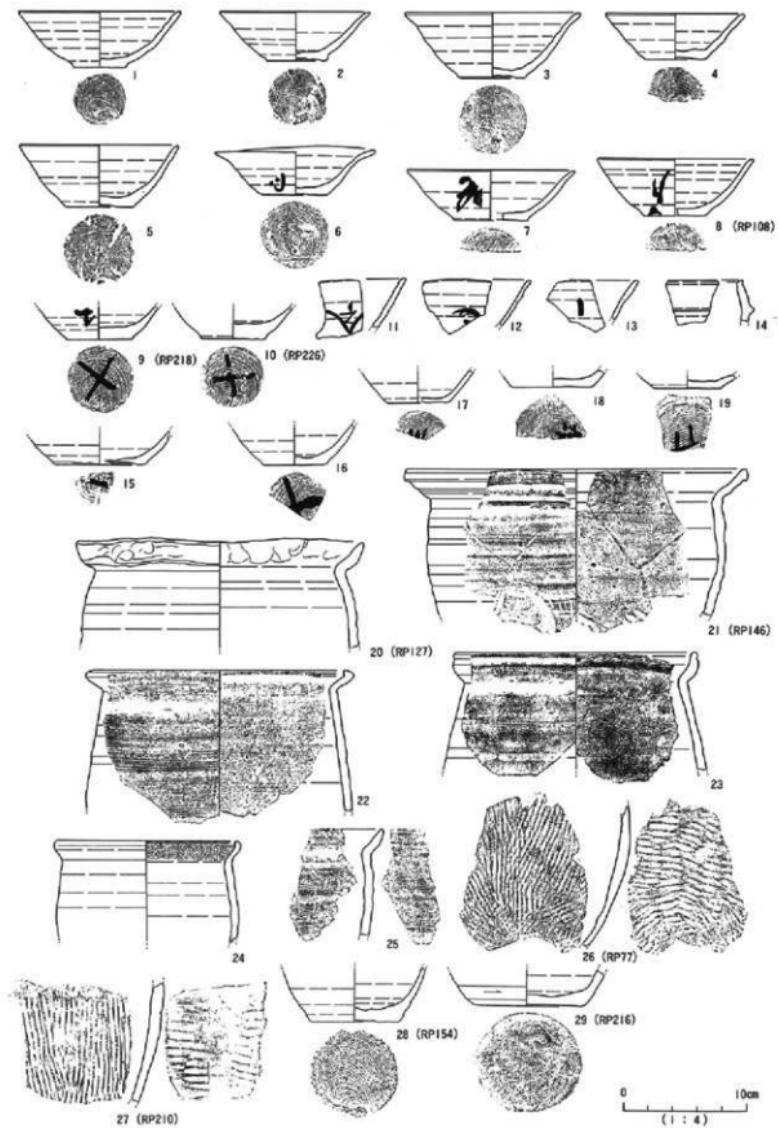
第12図 遺物実測図(4)



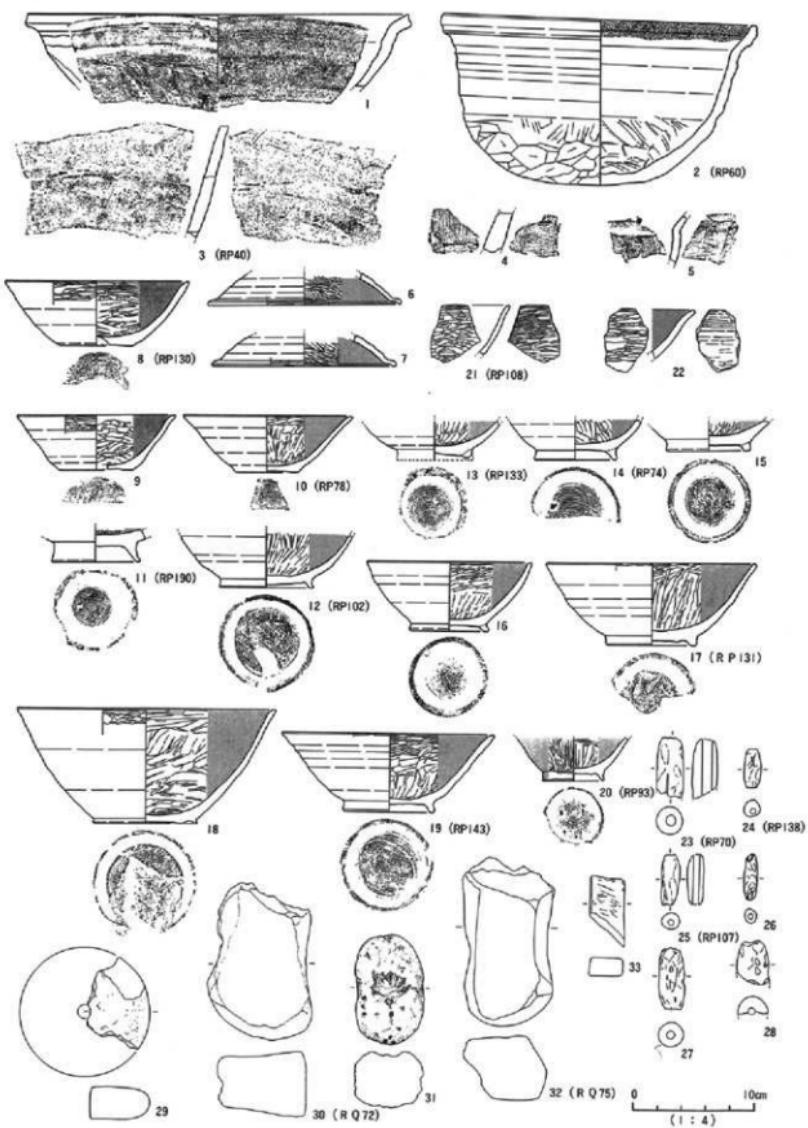
第13図 遺物実測図(5)



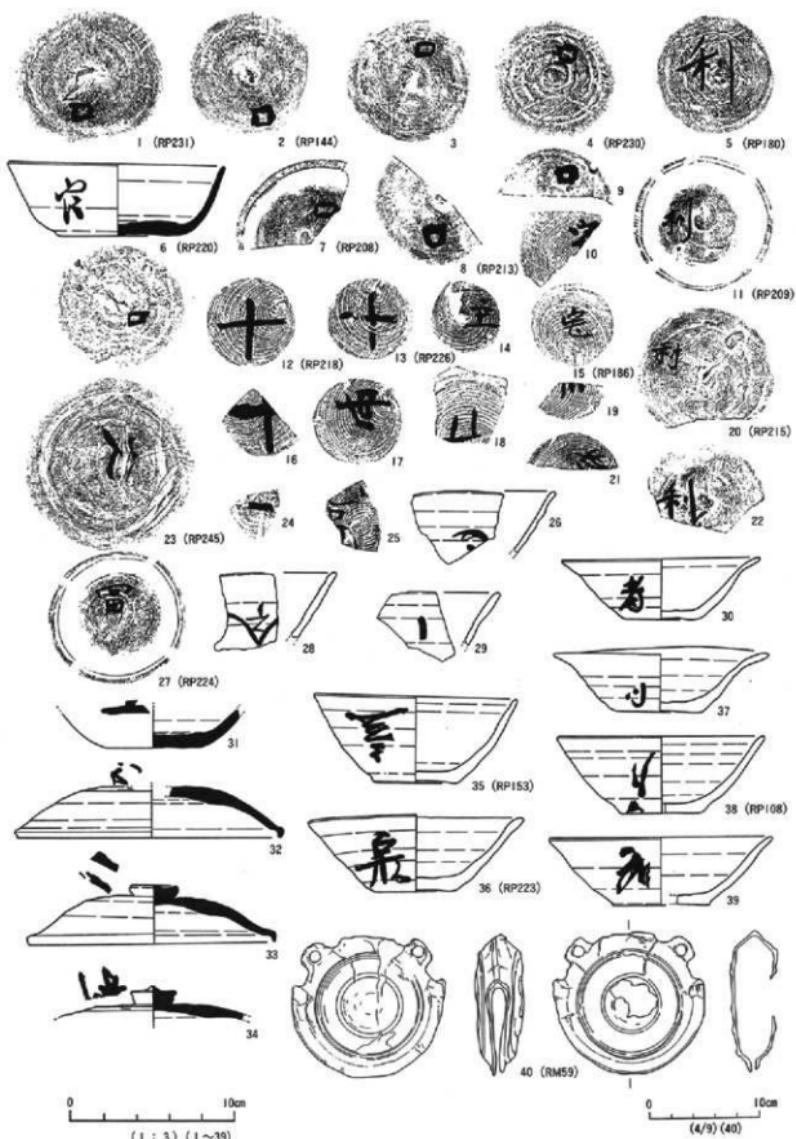
第14図 遺物実測図(6)



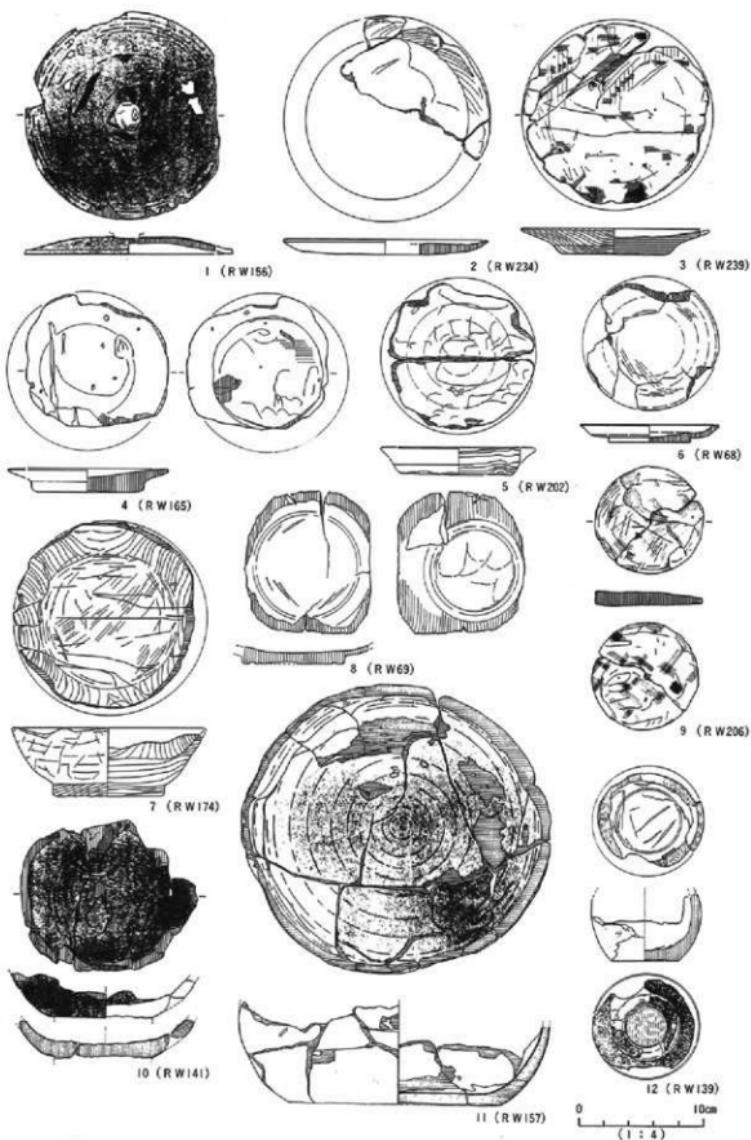
第15図 遺物実測図(7)



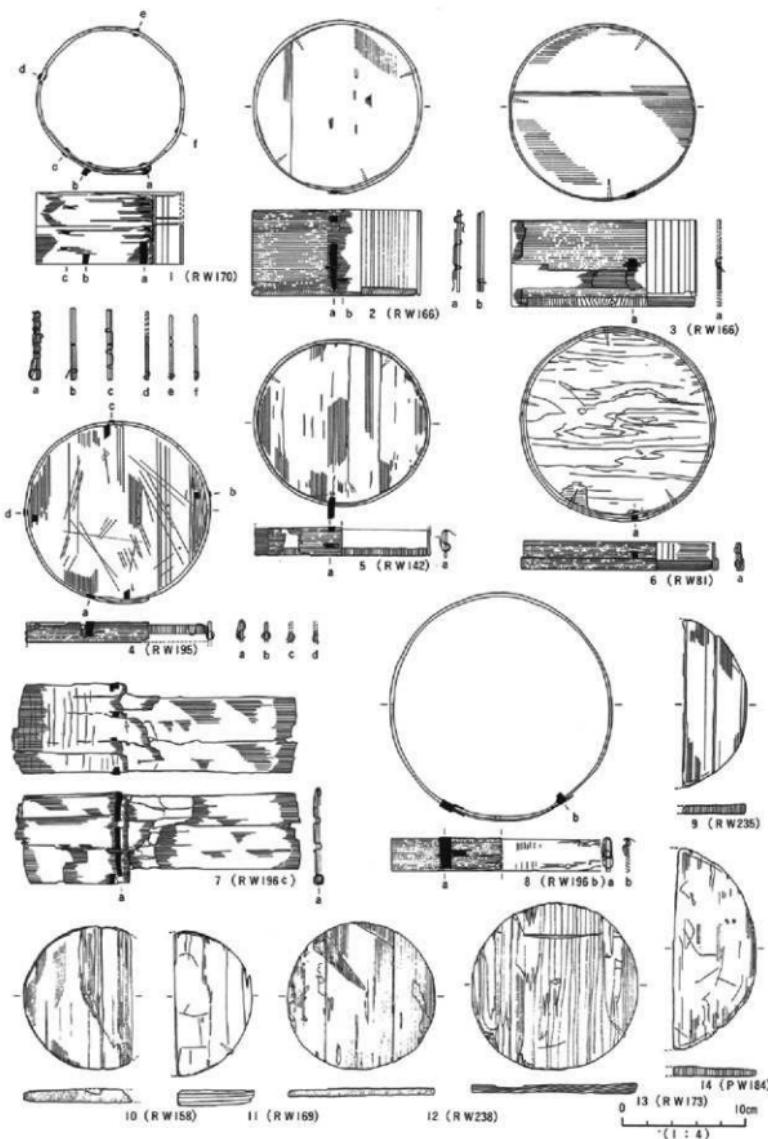
第16図 遺物実測図(8)



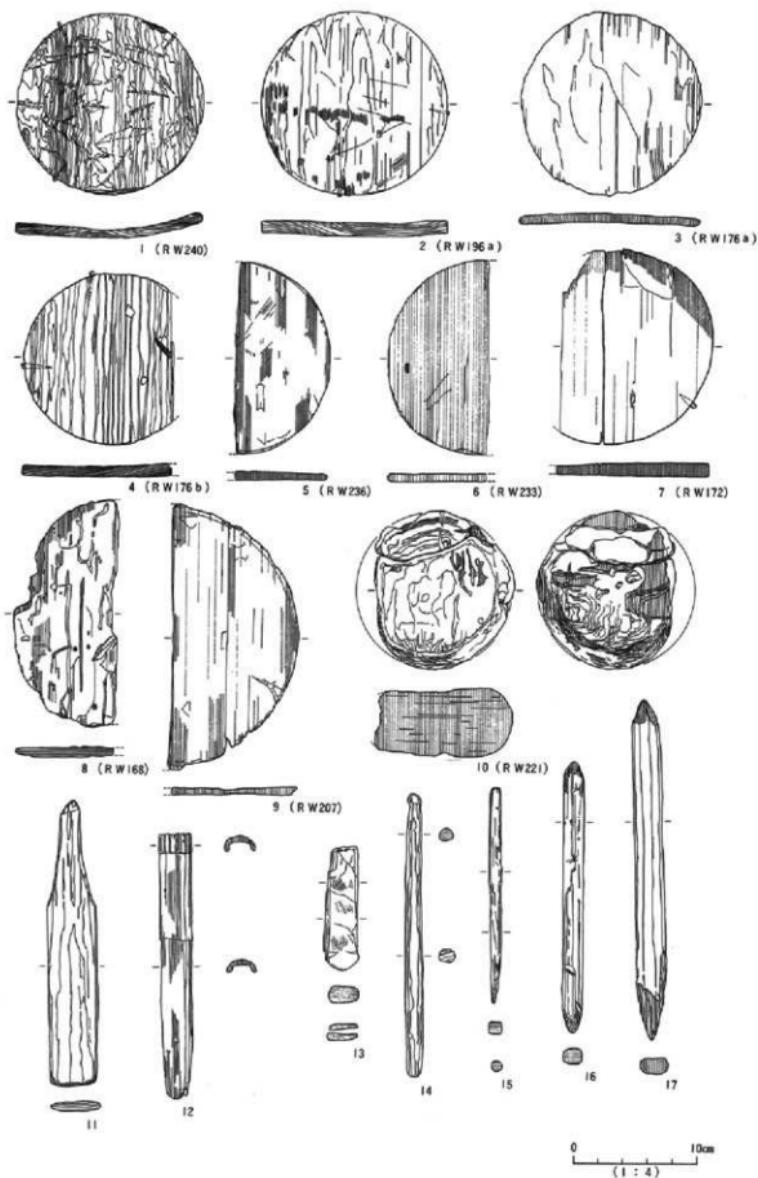
第17図 遺物実測図(9)



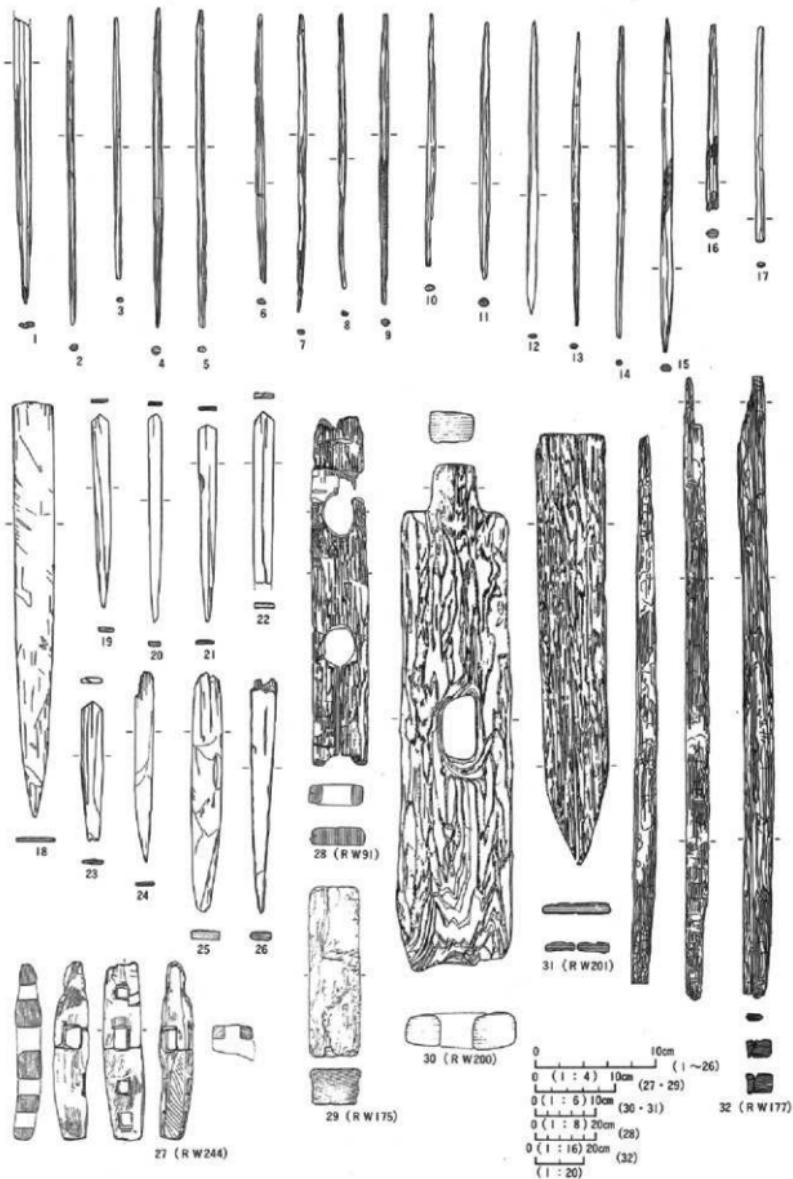
第18図 遺物実測図(1)



第19図 遺物実測図II



第20図 遺物実測図(II)



第21図 遺物実測図(1)

表1 上高田遺跡遺物観察表(1)

編 目 番 号	遺物 番 号	種別・器種	計 間 長(cm)				底部切離	調整枝法		出土地点 登錄番号	備 考	
			口径	底径	高さ	厚さ		内 面	外 面			
								ロクロ	ロクロ			
第 9 回	1 2 3 4 5	灰 器	130	60	39	4	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 1	R P46 重焼痕	
			134	74	31	4	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 1	R P21	
				68	(11)	3	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 1	R P15	
				80	(22)	4	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 1	R P22	
				49	6		ロクロ	ロクロ	SG 1			
第 10 回	6 7 8 9 10	あかやき土器	134	52	45	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 1	R P46 亂	
			136	50	45	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 1		
			95	48	21		回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 1	平底	
					10		ロクロ	ロクロ	SG 1	R P20		
					8		ロクロ	ロクロ	SG 1	R P21		
第 11 回	11 12 13 14	黒色土器 高台付灰	146	(70)	58	3.5	回転糸切	ミガキ	ロクロ	SG 1	R P96	
					9		ロクロ	ロクロ	SG 1	R P19		
					13		アテ・ナデ	タタキ	SG 1	R P99		
				49	(58)		ロクロ	ロクロ・ミガキ	SG 1	R P95		
			員	22.5	幅	49			SG 1	R P7		
第 12 回	15 16 17 18 19	土 製 品 土 器		23		(26)			SG 1	R P8		
				20.5		(48)			SG 1	R P9		
				22.5		(25)			SG 1	R P10		
				20		(41)			SG 1	R P12		
				22		41			SG 1	R P11		
第 13 回	20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30	須 恵 器		24.5		(57)			SG 1	R P13		
			126	39	3.5		回転糸切	ロクロ	ロクロ	SX 2	R P5 白雲母	
			129	47	4		回転糸切	ロクロ	ロクロ	SX 2	R P4	
			134	44	4		回転糸切	ロクロ	ロクロ	SX 2	R P1	
			鉢?	70			回転糸切	ロクロ	ロクロ	SX 2	R P3	
第 14 回	須 恵 器 壺	15.5		12			回転糸切?					
				員	24	幅	37	アテ	タタキ・カキメ	SX 2	R P2	
				40		17					R P6	
				33		7.5						
					10		ロクロ	ロクロ	SG 3	R P45		
第 15 回	1 2 3 4 5	須 恵 器			11.5		アテ	ロクロ	SG 3	R P29 灰被		
				123	47	40	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 3		
				124	57	40	2.5	回転糸切	ロクロ	SG 3		
				123	48	40		回転糸切	ロクロ	SG 3	R P34 黒斑	
				129	51	44	3.5	回転糸切	ロクロ	SG 3	R P31	
第 16 回	6 7 8 9 10	あかやき土器 高台付灰		123	52	39		回転糸切	ロクロ	SG 3	R P30 スス・被熱	
				146	56	53		回転糸切	ロクロ	SG 3	R P35	
				56			回転糸切	ミガキ	ロクロ	SG 3	R P41 肉内黑	
				64	40	3	回転糸切	ロクロ・ミガキ	ロクロ	SG 3	R P43	
					11		アテ	タタキ	SG 3	R P36		
第 17 回	11 12 13 14 15	あかやき土器 鉢			10		ロクロ	ロクロ	SG 3	R P25		
					10		アテ	タタキ	SG 3	R P37		
					10		アテ・ロクロ	タタキ・ケズリ	SG 3	R P38		
					11		アテ	タタキ	SG 4			
					(49)	9.5	アテ	タタキ	SG 5			
第 18 回	16 17 18 19 20	須 恵 器			9		ロクロ	ロクロ	SG 5			
					13		アテ	タタキ	SG 5	R P23		
				125	48	40	回転糸切	アテ	タタキ	X 0	墨書「主」	
					22		アテ	ロクロ・ケズリ	SG 6	V 墨書不明		
				(138)			アテ	ロクロ	SG 6	III		
第 19 回	21 22 23 24 25	須 恵 器 蓋		(131)	27		アテ	ロクロ	SG 6	III		
				(160)	(31)		アテ	ロクロ・ケズリ	SG 6	III 墨書不明		
				149	36		回転ヘラ切	アテ	ロクロ	SD13	墨書「二」	
				127	75	35	回転ヘラ切	アテ	ロクロ	X 0		
				(136)	68	29	回転ヘラ切	アテ	ロクロ	SG 6	IV 重焼痕	
第 20 回	1 2 3 4 5	須 恵 器 高台付灰		(140)	(69)	27	回転糸切	アテ	ロクロ	SG 6	IV 灰被	
				107	53	47.5	回転ヘラ切	アテ	ロクロ	SG 6	III	
				113	61	50	回転ヘラ切	アテ	ロクロ	SG 6	R P228 粗砂器	
				166	(103)	80	回転糸切	アテ	ロクロ	SG 6	R P208 粗砂器「口」	
				130	78	51	回転ヘラ切	アテ	ロクロ	SG 6	R V P209 粗砂器「利」	
第 21 回	6 7 8	あかやき土器		126	76	48	回転ヘラ切	アテ	ロクロ	SG 6	R P224 粗砂器「富」	
				136	80	43.5	回転ヘラ切	アテ	ロクロ	SG 6	R P237 重大	

表2 上高田遺跡遺物観察表(2)

測定番号	遺物番号	種別・部類	計測値(mm)		底部切離	調整校法		出土地点 並び記号	備考	
			口径	底径	高さ	側厚	内面	外面		
第11回	高台付環	環	9	139	83	42	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P178
			10	(136)	(79)	51	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV 転用硯
			11	(128)	82	36	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 V
			12	120	75	36	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P229
			13	(124)	74	35	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 極書「口」
			14	135	70	40	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P230 極書「口」
			15	136	72	35	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P212
			16	135	84	36	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P231 極書「口」
			17	139	90	34	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ・カズリ	SG 6 R P245 極書不明
			18	133	70	36	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P214
			19	127	80	39	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P183
			20	129	66	42	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV R P180 極書「利」
			21	137	92	38	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV 火鉢
		環	22	144	95	31	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV R P194
			23	132	76	46	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV R P220 極書「音・口」
			24	132	82	37	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV R P215 極書「村」
			1	94	(23)		回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV R P191
			2	131	74	38	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV R P144 極書「口」
			3	134	80	36	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV R P214 極書「口」
			4	134	73	35	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV ヘ書「十」
			5	129	(68)	35	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 V スス
			6	(70)	(30)		回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 V R P245 極書「口」
			7	(68)	(30)		回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV 極書不明
			8	(58)	(23)		回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 III 極書不明
			9	90	(72)			ロクロ	ロクロ・カキメ	SG 6 R P90 灰被
		壺	10	68	46		回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV 回転ヘラケズリ
			11	(76)	(25)		回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV 極書「利」
			12	106	(103)			ロクロ	ロクロ	SG 6 IV 灰被
			13	117	(77)			ロクロ	ロクロ	SG 6 IV 三筋
			14					ロクロ	ロクロ	SG 6 IV 回転ヘラケズリ
			15	156	(133)			ロクロ	ロクロ	SG 6 R P89 回転ヘラケズリ
			16	109			回転余切?	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV
			17				平行アチ	平行タタキ	SG 6 V R P151	
			18		7		アチ	平行タタキ	SG 6 V 断面セビア	
			19		9.5		アチ	平行タタキ	SG 6 III	
			20		16		アチ	平行タタキ	SG 6 III	
			21		11		アチ	アチ	SG 6 R P63	
第13回	あかやき土器	皿	1	92	42	23	回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 皿
			2	92	43	22	回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 V R P47
			3	94	47	20	回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P48
			4	93	44	23	回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P49 スス
			5	89	42	24	回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P50
			6	91	42	25	回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P51
			7	91	46	24	回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 V
			8	96	45	23.5	回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 V R P52
			9	94	46	23	回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P53
			10	98	47	25	回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P54
			11	94	42	22.5	回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P56
			12	98	44	24	回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P58
			13	98	49	23.5	回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P61
		高台付環	14	95	48	24	回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P62
			15	92	44	25	回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P65
			16	91	43	22	回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P66
		高台付環	17	98	51	20	回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P135
			18	93	42	17	回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P136
			19	92	44	25	回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P137
			20	99	45	18.5	回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 III
			21	98	48	26	回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6
			22	76	44	49	回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P71
			23	60	(38)		回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 R P57
			24	74	(24)		回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 III スス
			25	80	(39)		回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6
			26	64	(24)		回転余切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV スス

表3 上高田遺跡遺物観察表(3)

組合 番号	遺物 番号	種別・器種	計測値(cm)				底部切痕	調整核法		出土地点 登錄番号	備考	
			口径	底径	高さ	板厚		内面	外面			
第 13 回	27	灰釉陶器	碗		84		回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SG 6 VR P86	舶来毛臉	
	28			129	54	43	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP79	直	
	29			124	52	35	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP82	直	
	30			135	58	45	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP83	直	
	31			121	52	39	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP87	墨書き「省」	
	32			147	51	47	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP103	ロクロ目顯著	
	33			145	50	53	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP121		
	34			123	53	45	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP92		
	35			136	50	45	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP104	スズ	
	36			125	55	46	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP106		
第 14 回	37			130	52	50	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP105		
	38			124	58	50	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP122		
	39			134	48	45	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP116	使用スレ	
	40			(124)	45	38	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP123		
	1			136	48	37	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP124		
	2			128	48	49	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP125		
	3			156	58	53	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP129	直	
	4			125	48	47	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP147	直	
	5			125	60	52	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP150	墨書き不明	
	6			59	(44)		回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP152		
第 15 回	7			123	52	54	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP153	墨書き不明	
	8			129	54	47	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP162		
	9			136	56	50	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP167		
	10			126	54	46	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP171		
	11			123	55	40	回転糸切?	ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG 6 RP179		
	12			120	51	44	回転糸切?	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP110		
	13			128	61	49	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV RP192	スズ・灯芯跡	
	14			130	58	46	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV RP197		
	15			128	53	49	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 VR P222		
	16			150	58	58	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 VR P211	スズ・灯芯跡	
あかや8土器	17		鉢?	66	(51)		回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP217		
	18			122	47	42	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV RP198		
	19			132	51	47	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 VR P223	墨書き「宗」	
	20			(118)	52	51	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 RP228	墨書き「世」	
	21			(120)	50	40	回転糸切?	ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG 6 VR P227	スズ	
	22			130	59	45	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 VR P246	内外面スズ	
	23			128	56	42	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV RP186	墨書き「也」	
	24			149	55	65	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV	内外面スズ	
	25			(32)	(74)	43	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV		
	26			(124)	51	54	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV		
第 15 回	27		高台付環	130	63	54	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV	内外面スズ	
	1			(132)	44	46	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV		
	2			(121)	47	45.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV		
	3			142	54	54	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV		
	4			112	49	48	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV		
	5			(130)	57	51	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV		
	6			132	54	40	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6	墨書き不明	
	7			(136)	(60)	41	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 V	墨書き不明
	8			(126)	50	47	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 VR P108	墨書き不明	
	9			54	(27)		回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 VR P218	墨書き「十」	
第 15 回	10			50	(27)		回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 VR P226	墨書き「十一」	
	11					4.5		ロクロ	ロクロ	SG 6 IV	墨書き「口」	
	12				(38)	4		ロクロ	ロクロ	SG 6 V	墨書き不明	
	13			(118)				ロクロ	ロクロ	SG 6 IV	墨書き不明	
	14		羽釜		(33)	7		ロクロ	ロクロ	SG 6 IV		
	15				(74)		回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV	墨書き不明	
	16				(50)	(33)	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 III	墨書き不明	
	17				(48)	(26)	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV	墨書き不明	
	18				(66)		回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV	墨書き不明	
	19				(54)	(11)	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV	墨書き不明	
第 15 回	20			235	(86)	9		ロクロ	ロクロ	SG 6 RP127		
	21			270	(120)	8		ロクロ	ロクロ	SG 6 RP146		
	22			(202)	(116)	8		ロクロ	ロクロ	SG 6 IV	外側スズ	

表4 上高田遺跡遺物観察表(4)

探査番号	遺物番号	種別・器種	計測値(mm)		底部切離	調査枚法		出土地点登録番号	備考	
			口径	底径		内面/裏面	外側/表面			
第15回	23	甕	196	95	7	ロクロ	ロクロ・ハケメ	SG 6 IV		
	24		146	(83)	6.5	ロクロ	ロクロ	SG 6 III		
	25		(87)	9	ロクロ	ロクロ	SG 6 IV	ヘラ痕		
	26		115	9	アテ	タタキ	SG 6	R P77		
	27		(96)	11	アテ・ハケメ	タタキ・ハケメ	SG 6	R P210		
	28		72	59	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG 6	R P154	
第29回	29	鉢	86	不明	ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG 6	R P216		
	1		(31.0)	59	10	ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG 6 III		
	2		252	140	9	ロクロ・ナデ	ロクロ・ケズリ	SG 6	R P69	
	3		90	11	ナデ	ナデ	SG 6	R P40	外側スス	
	4		14	14	ハケメ	ハケメ	SG 6			
	5		7	7	ハケメ	ハケメ・ナデ	SG 6			
第1回	6	蓋	152	26	4	ミガキ	ロクロ・ミガキ	SG 6 V	内墨	
	7		150	25	5	ミガキ	ロクロ・ミガキ	SG 6 IV	内墨	
	8		149	69	53	不明	ロクロ・ミガキ	SG 6	R P130	
	9		(130)	(60)	45	回転糸切	ミガキ	SG 6 V	内墨	
	10		137	52	50	回転糸切	ロクロ・ミガキ	SG 6	R P78	
	11		72	(26)	回転糸切	ミガキ	ロクロ	SG 6	R P190	
第12回	12	環	(76)	(44)	不明	ロクロ・ミガキ	ロクロ	SG 6	R P102	
	13		(63)	30	回転糸切	ミガキ	ロクロ	SG 6	R P133	
	14		66	回転糸切	ロクロ・ミガキ	ロクロ	SG 6	R P74		
	15		89	(25)	回転糸切	ロクロ・ミガキ	ロクロ	SG 6 IV	内墨	
	16		(134)	64	回転糸切	ミガキ	ロクロ	SG 6	内墨	
	17		170	74	66	回転糸切	ロクロ・ミガキ	SG 6	R P131	
第16回	18	高台付环	211	84	94.5	回転糸切	ロクロ・ミガキ	ロクロ・ミガキ	SG 6 IV	内墨
	19		174	74	64	回転糸切	ロクロ・ミガキ	ロクロ・ミガキ	SG 6 III R P143	内墨
	20		50	(35)	回転糸切	ロクロ・ミガキ	ロクロ・ミガキ	SG 6	R P93	
	21		40	4	回転糸切	ロクロ・ミガキ	ロクロ・ミガキ	SG 6	R P108	
	22		6	6	ミガキ	ミガキ	SG 6		非墨色化	
第23回	23	黒色土器	長(48)	22	ナデ	ナデ	SG 6	R P70		
	24		31.5	13	ナデ	ナデ	SG 6	R P138		
	25		41.5	14	ナデ	ナデ	SG 6	R P107		
	26		37	12	ナデ	ナデ	SG 6 IV			
	27		51	21.5	ナデ	ナデ	136L			
	28		(36)	24	ナデ	ナデ	C-3 II			
第29回	29	土製品	訪録車往	106	厚26	ナデ	ナデ	SG 6 III		
	30		石	共129	幅85 厚53			SG 6	R Q72	
	31		石	90	56	36		SG 6 IV	火山岩壁	
	32		石	138	75	53		SG 6	R Q75	
	33				15		SG 6			
第40回	40	金属性質品	口	高58	62	20		SG 6	RM59	
	1		蓋	170	13	6	ロクロビキ	ロクロビキ	SG 6 III RW156	
	2		瓶	145	12		ロクロビキ	ロクロビキ	SG 6 V RW234	
	3		皿	150	90	25	13	ロクロビキ	ロクロビキ	SG 6 IV RW239
	4		皿	116	90	20	ロクロビキ	ロクロビキ	SG 6 IV RW165	
	5		碗	121	22		ロクロビキ	ロクロビキ	SG 6 V RW202	
第5回	6	本製品	碗	105	7	15	ロクロビキ	ロクロビキ	SG 6 II RW68	
	7		皿	149	92	56	31	ロクロビキ	ロクロビキ	SG 6 IV RW174
	8		皿	115	82	15	6	ロクロビキ	ロクロビキ	SG 6 II RW69
	9		皿?	87	13		ロクロビキ	ロクロビキ	SG 6 V RW206	
	10		碗	144	81	34.5	ロクロビキ	ロクロビキ	SG 6 II RW141	
	11		鉢	252	172	82	ロクロビキ	ロクロビキ	SG 6 III RW157	
第12回	12	曲物	蓋	55	(54)	8	ロクロビキ	ロクロビキ	SG 6 RW130	
	1		横122	高59	厚		側ケビキ	底板ケズリ	SG 6 IV RW170	
	2		141	71	3		側ケビキ	底板ケズリ	SG 6 IV RW166	
	3		150	72	3		側ケビキ	底板ケズリ	SG 6 IV RW165	
	4		147	17	7		側ケビキ	底板ケズリ	SG 6 IV RW155	
	5		142	23	6		側ケビキ	底板ケズリ	SG 6 IV RW142	
第19回	6	曲物	155	7			側ケビキ	底板ケズリ	SG 6 RW81	
	7		235	76	5		側ケビキ		SG 6 IV RW196	
	8		183	27	3		側ケビキ		SG 6 IV RW196	
	9		136		8		チヨウナケズリ	SG 6 IV RW235	木町下	
	10		115		12		チヨウナケズリ	SG 6 III RW158		

表 5 上高田遺跡遺物觀察表(5)

番号	進物 番号	種別・器種	計 横 縦(mm)			調整校 法		出土地点 登録番号	備 考
			径	長	幅	表面	裏面		
第19回	1	曲 物 庫	116	14	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	S G 6 IV RW169	
	2		120	6	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	S G 6 IV RW238	
	3		137	7	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	S G 6 IV RW173	
	4		164	8	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	S G 6 IV RW184	
	5		156	5	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	S G 6 IV RW240	木釘止
	6		152	11	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	S G 6 IV RW196	木釘止
	7		148	8	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	S G 6 IV RW176a	
	8		125	10	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	S G 6 IV RW176b	木釘止
	9		157	7	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	S G 6 IV RW236	
	10		160	7	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	S G 6 V RW233	樹皮止
	11		158	11	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	S G 6 RW172	
	12		185	8	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	S G 6 RW168	
	13		216	7	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	S G 6 V RW207	
	14		未 製 品	112	57	ロコロビキ	ロコロビキ	S G 6 IV RW221	
第20回	1	棒 状 備 品	236	40	5.5 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	
	2		219	27	7 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	
	3		128	28	15 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	
	4		234	14.5	11 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	瘤状削出
	5		179	11	10 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	片尖頭
	6		224	17	14 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	両尖頭
	7		279	23	14 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	両尖頭
	8		235	13	5 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6 IV	両尖
	9		257	7	5 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	両尖
	10		217	5.5	3 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	両尖
	11		265.5	8.5	7 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	両尖
	12		264	7	5 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	両尖
	13		223	7	5 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	両尖
	14		247	6	4 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	両尖
	15		228	6	4 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	両尖
	16		241	7	5 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	両尖
	17		243	7	4 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	両尖
	18		214	8	7 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	両尖
	19		257	7	5 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	両尖
	20		243	7	4 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	両尖
	21		258	5	4 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	両尖
	22		277	10	5 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	両尖
	23		155	9	7 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	半穴
	24		177	7	4 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	半穴
第21回	1	本 製 品	342	32	4 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	鶴頭・尖頭
	2		166	13	5 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	鶴頭・切込
	3		171	11	4 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	鶴頭・切込
	4		161	14	2.5 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	鶴頭・切込
	5		143	15	4.5 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	鶴頭・切込
	6		115	9	7 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	先端穴
	7		155	18.5	4.5 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	頭部穴
	8		198	23	8 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	頭部穴
	9		194	20.5	7 ケズリ	ケズリ	ケズリ	S G 6	頭部穴
	10		219	49	40 ケズリ・ホゾアナ	ケズリ・ホゾアナ	ケズリ・ホゾアナ	S G 6 IV RW244	粗木
	11		1133	184	59 ケズリ・ホゾアナ	ケズリ・ホゾアナ	ケズリ・ホゾアナ	S G 6 RW91	
	12		206	63	44 ケズリ・ホゾアナ	ケズリ・ホゾアナ	ケズリ・ホゾアナ	S G 6 RW175	枕木櫛
	13		440	25	ケズリ・ホゾ・ホゾアナ	ケズリ・ホゾ・ホゾアナ	ケズリ・ホゾ・ホゾアナ	S G 6 IV RW200	
	14		712	110	18 チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	S G 6 IV RW201	
	15		2560	105	82 チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	チヨウナケズリ	S G 6 IV RW177	織機櫛

5まとめ

上高田遺跡・木戸下遺跡の調査から、庄内高瀬川の南岸に展開された古代集落や当時の旧地形に伴う河川流路などをはじめとする多くの考古学的知見が得られた。

特に本遺跡での川跡SG6の調査からは、層位毎に様相を異にする遺物群が検出され、土器他の遺物群の変遷を探る上では当該地域における基本的資料と認識される。

例えば、SG6川跡最下層での古相を示す須恵器群とそれらに伴ったと考えられる削り調整の施されるあかやき土器壺類の抽出(Ia期)、あるいは火山灰の混入から二次堆積層と推測されるものながら、十和田aテフラに関連する時期の所産とは考え難いIb期の土器群および豊富な挽物容器他の木製品、施釉陶器類の普及に起因したと考えられる黒色土器の量的増大と質的変容の窺えるII期中層段階での諸相、そして古代終末の土器群に位置づけられる小形皿類をはじめとした柱状高台の出現段階と位置づけられるIII期の検出とそれらの分布的広がりの追認等である。

一方、課題としてこれからも検証の必要がある問題は、泥炭層(4層)の形成時期と火山灰の降灰時期の確定、およびこれらと遺物群との相関関係の把握等と思われた。

ちなみに、火山灰の含まれる層準は4層(SG6中央南面セクション)の植物腐植土(泥炭)を挟んで2枚(回)があり、SG6の埋積土が一部開析されて後に2層として再堆積(6・7層中の火山灰と同一かどうかは不明)する状況も把握される。従って、火山灰の降下後しかも時間的に大部経過した時点でIII期の遺物相が展開したことは明らかながら、泥炭層下の6・7層等に含まれる火山灰を如何に理解するかがここでは大きな問題として浮上しよう。少なくとも土器群の年代観はIb期が9世紀の第2～第3四半期(後者が主体か)、II期が9世紀第4四半期を中心として10世紀第1四半期にかかる頃と考えられることからすれば、西暦915年と見られる降灰時期との年代観は新しくなりすぎるのではないかとの疑念も生じる。あるいは、あかやき土器壺での外反タイプを捉えて、Ib期とII期は二次堆積による混在相との理解が正しければ何等支障がないかもしれないのだが。

最後に本遺跡出土資料の理化学的分析結果を列記しておく。

SG6およびSG4から採取された火山灰はいずれも十和田aに由来し、各資料ともに本質物質でない長石や石英などの混ぜものの混在から二次堆積によるものと分析された。また、RW158の曲物板と部材RW177bを基とした放射性炭素の年代測定結果は前者が 1980 ± 180 B.P. (30 B.C.)、後者は 1420 ± 90 B.P. (A.D.530) の値であり、土器などの考古学的年代よりは明らかに古い値と判断される。一方、Ib期に帰属する多くの木製品の中から幾つか選んで行った樹種同定の分析の結果、椀(RW68)・蓋(RW156)・皿(RW234)が「ケヤキ」、曲物底(RW158)・部材(RW177A)・同(177B)・同(RW200)・同(RW201)が「スギ」、部材(RW91)が「クリ」と識別された。ケヤキを素材とした挽物の木製容器は、これまでの出土例か多くないことからも注目される。また、SG6より採取された土壤中の骨の分析では、骨表面の腐食が著しいことなどから断定できないとされるものの成人骨の可能性が考えられると推定された。(引用・参考文献は割愛した。)

木戸下遺跡

1 調査の概要（第22図）

今回の発掘調査は、木戸下遺跡のうち、ほ場整備事業の農道と国道345号線予定地に並行する排水路部分を調査対象として実施している。調査区の幅は約1.8m、長さは825mで全体の調査面積は約1,500m²になる。国道345号線予定地については、今回の調査から除外してあるため、今後同国道が建設なる場合は山形県教育委員会との協議が必要になる。

調査は、はじめに表土を重機を用いて排水路の部分だけを除外し、次に土の状態を確認しながら面を整理し、遺構や遺物の検出を行った。調査の後半では、遺構の平面図や遺物の写真撮影等の記録作業を行い、最後に遺物の取り上げを行った。

調査区は線堀りとなるため道路等を境として便宜上9つの地区に分け、各々に1T～9Tのトレンチ名を付している。このうち1T～5Tは遺跡の東側、6T～8Tは遺跡の北から北西側、9Tは南西側にある。

地目は、ほとんどが水田で、一部畠地になっている部分がある。地形は南東から北西にかけて緩やかな傾斜をもち、標高は6～7mを測る。

遺物の取り上げも遺構を除いては、各トレンチ毎に行った。遺構内からの出土遺物は覆土層位にしたがって「F 1」等の表記で取り上げ、重要なものについてはR P番号を付けて出土状態を平面図に起こしたものがある。



第22図 木戸下遺跡調査概要図 (1 : 4000)

2 遺構の分布（第23図）

遺跡の基本層序は、第Ⅰ層が耕作土、第Ⅱ層が暗褐色シルト、第Ⅲ層が褐色シルト、第Ⅳ層が黄褐色シルトないし砂で、第Ⅲ層が遺物の包含層、第Ⅳ層が無遺物層で遺構の形成面となるものである。

調査の結果、遺構や遺物は(1)1Tの北側から6Tの東側部、(2)8Tの西側部、(3)3Tの中央部の三ヶ所からまとまって検出された。(1)と(2)は、庄内高瀬川の現河川添いにあることから、旧河川の自然堤防にあたるものと思われる。その他の地域は、現水田面のすぐ下で第Ⅳ層が無遺物層に達し、遺構や遺物はほとんど認められない。

7月下旬から8月上旬に実施した、山形県教育委員会による木戸下遺跡の灌漑排水事業に係わる発掘調査でも同じような結果が出ている。ただし、山形県教育委員会による調査では、遺跡の範囲が北西側と南西側にさらに広がるようである。

3 遺構と遺物（第23・24図、図版17・18）

今回の発掘調査では、遺構として土壤が4基、建物の柱穴が5個、区画や用排水、旧河川等に係わる溝跡が4条、性格不明の落ち込み2基等が検出された。

土壤は、1T・6T・8Tから検出されている。平面形は略円形を呈し、大きさは1m内外、深さは20~70cmを測る。遺物はSK1土壤から須恵器坏(第24図10)、SK2土壤からあかやき土器甕の口縁部片が出土している。10は、底径に比して器高が浅い坏で、底部の切り離しは箇切りによる。

柱穴は、6T東側から5個並んで検出された。柱掘り方の大きさは70cm内外、深さは30~50cmで、中に直径20cm程の柱アタリを有する。柱穴と柱穴の間隔は180cm~240cmを測るが、柱穴の並びが直線ではなく、幅40cm程の溝に添って弧状に並ぶのが特徴である。遺物はE P12・13から須恵器坏・甕(同11)、あかやき土器甕及び中世陶器搭鉢の破片が5点出土している。本柱穴群は、調査区のさらに西側に延びるものと思われる。

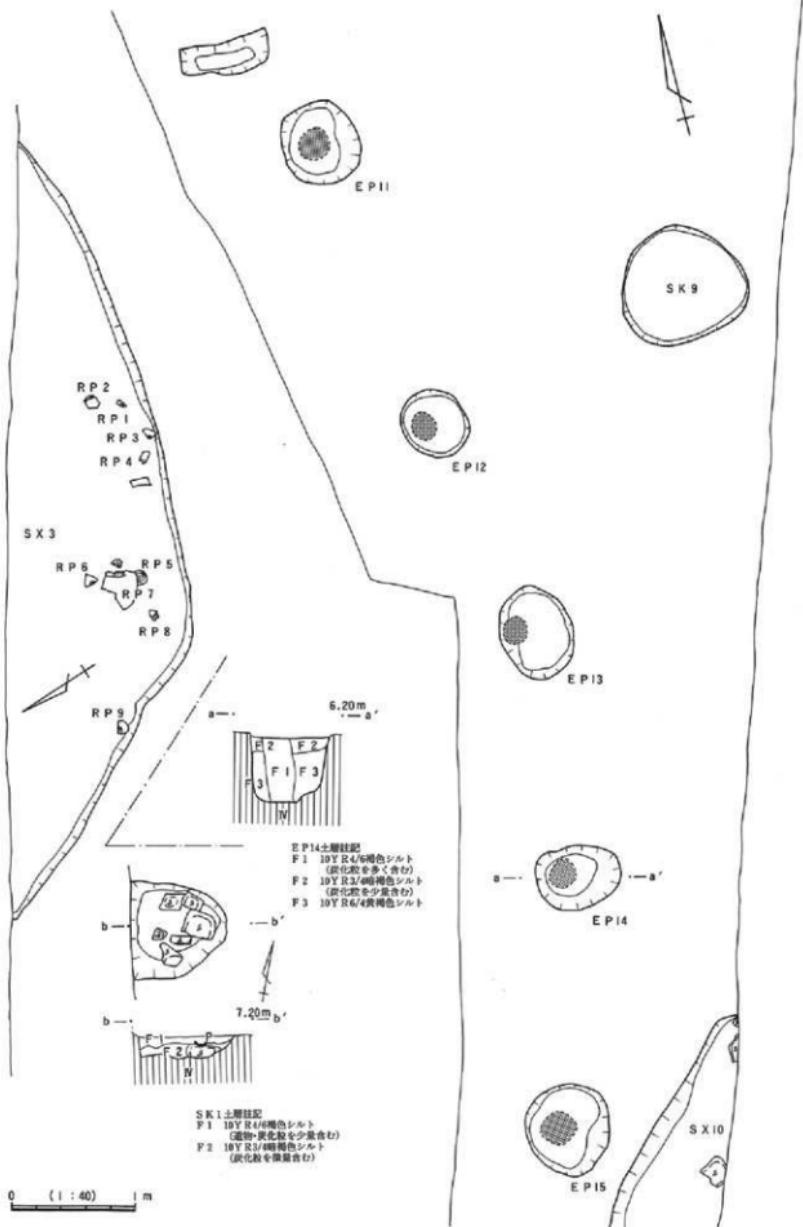
柱穴群のすぐ南東に、梢円形を呈するSX10落ち込み遺構があり、大きさは南北最大径3.10m、南北最大径0.90m、深さが約15cmを測る。覆土は3層に分けられ、F2からあかやき土器坏、甕の細片が2点出土している。

SX3落ち込み遺構は、3T中央部で検出されている。平面プランが不整の隅丸方形を呈し、大きさは東西最大径6.40m、南北最大径1.60m、深さが約15cmを測る。基本層序の第Ⅲ層中から掘込まれたと思われるが、確認出来たのは第Ⅳ層上面からである。

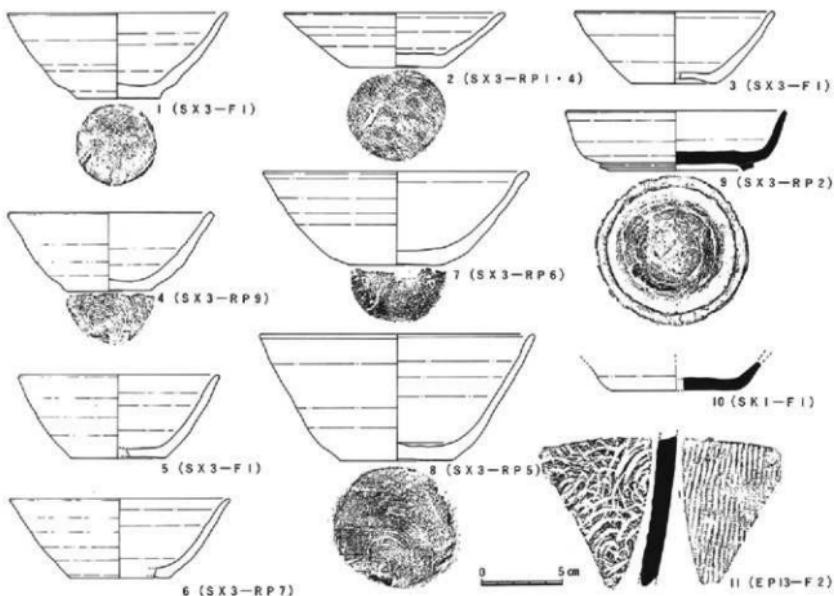
覆土は3層に分けられ、F1が褐色砂質シルト、F2が炭化物を多く含む明褐色砂質シルト、F3がにぶい黄褐色粘質シルトとなっている。遺物はF1・F2から多く出土し、F3からは小量しか出土しない。

F2からあかやき土器坏(第24図1~8)がほぼ完全な形で約10点発見されており、特に壁際からの出土が多い。この他須恵器坏(9)と内面黒色土器坏も5点出土している。

溝跡は、幅20cm程の狭いものと、幅が10mを超す広いものとの二つがある。後者は6T~8Tで多く検出されており、旧河川に關係するものと思われる。



第23図 木戸下遺跡遺構平面図 (1:40)



第24図 遺物実測図

4まとめ

木戸下遺跡の今回の調査は水路等に関連する線の調査のため、遺構はほとんどが部分的な検出に留まっている。ここでは出土遺物の検討をもとに、各遺構の時期を主に述べる。

土壌のうちSK1土壌は、窓切りの須恵器坏が1点出土しており、量的な問題があるにしても、時期は平安時代前半9世紀前半頃と推定しておきたい。SK2土壌は、あかやき土器窓の口縁部が1点出土しており、大きく平安時代10世紀頃と推定しておく。

E P 11～15の柱穴群については、平安時代後半の土器が多くを占めるが、1点中世陶器摺鉢の破片が出土しているため、時期の決定は保留しておく。ただし、柱アタリの存在及び柱間が北から240cm・180cm・210cm・210cmと尺単位に統一されていることから、廂や縁東の可能性を含めて、建物跡の一部を構成することは間違いないと思われる。

S X 10落ち込み遺構は、あかやき土器坏・甕の細片が2点出土しており、時期的には平安時代10世紀頃に属するものであるが、形態等なお不明な点が多い。

S X 2落ち込み遺構の遺物のうち主体を占めるあかやき土器坏は、底部の切り離しが回転糸切り無調整で、厚手で量感のある作りをし、器高が全体にやや高めな点に特徴がある。法量が比較的小さいもの（第24図1～6）と大きいもの（同7・8）に分けられる。あかやき土器の器種が坏だけのため、時期の限定期が困難であるが、伴出した黒色土器柄や糸切りの須恵器坏も考慮して、平安時代9世紀後半頃と推定される。ただし、第24図9の須恵器坏は、底部が窓切りで器高に比して底径が広い等の特徴から、8世紀末まで遡り得る。

報告書抄録

ふりがな	かあたかだいせき・さどしたいせきはくつちょうさほうこくしょ						
書名	上高田遺跡・木戸下遺跡発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第25集						
編著者名							
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター						
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 Tel 0236-72-5301						
発行年月日	西暦 1995年 3月 31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上高田	山形県鶴岡市 郡遊佐町大字富岡字上家ノ前	6461	2080	39度 1分 51秒	139度 54分 31秒	19940711～ 19940908	3,000	県営ば場 整備事業 (月光川 下流地区)
木戸下	山形県鶴岡市 郡遊佐町大字富岡字木戸下	6461	2083	39度 2分 10秒	139度 57分 7秒	19940719～ 19940729	1,500	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上高田	集落跡 河川跡	平安時代 (9～10C)	柱穴跡 溝跡・土壤 河川跡		須恵器 あかやき土器 黒色土器 木製品 金属製品(鉗口)		自然堤防上の集落跡、 近接して平安時代の河川跡が検出された。 河川跡出土の陶物容器 他木製品が注目される。	
木戸下	集落跡	平安時代 (8C末～ 10C前葉)	柱穴跡 溝跡		須恵器 あかやき土器 黒色土器		高瀬川左岸の微高地に 立地する平安時代の集落跡。トレンチ調査の 為集落の一部を検出したに止まる。	

図 版

図版 1



S G 6 河川跡全景（南西上空から）

上高田遺跡

図版 2



上高田遺跡近景（西から）



調査風景 1（北から）



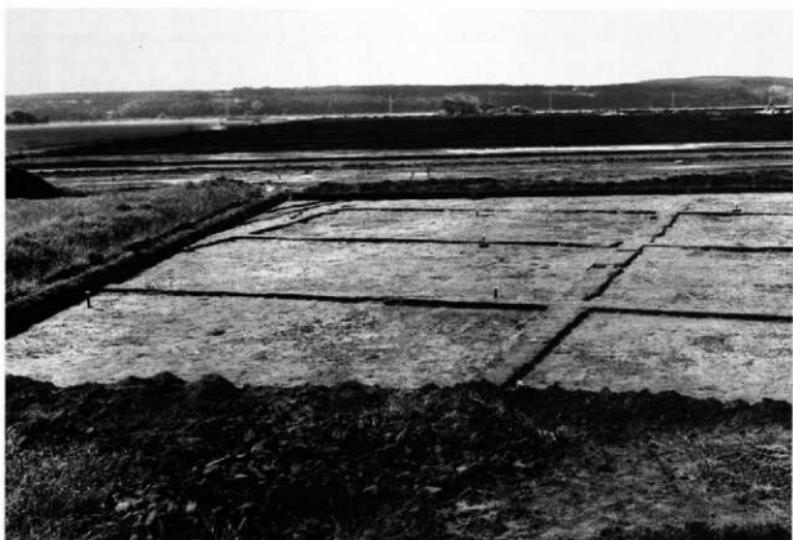
調査風景 2（北から）



調査風景 3（南から）



調査風景 4（西から）



上高田遺跡 A 区近景（東から）



SG 1 (L) 南 土錐出土状況（東から）



SX 2 内造構検出状況（南から）



SG 4 検出状況（北から）



SG 5 検出状況（南から）

上高田遺跡

図版 4



S G 3 河川跡遺物出土状況（北西から）



S G 3 河川跡発掘状況（北西から）

図版 5



SG 6 坑列検出状況（西から）



SG 6 坑列検出状況（北から）



SG 6 中央北側土層断面（北西から）



SG 6 中央南側土層断面（南から）



SG 6 完掘状況（南から）

上高田遺跡

図版 8



SG 6 あかやき土器 皿 出土状況 (南から)



SG 6 あかやき土器 壺 出土状況 (南東から)



SG 6 木製品 蓋 出土状況 (北東から)



SG 6 木製品出土状況 (北から)



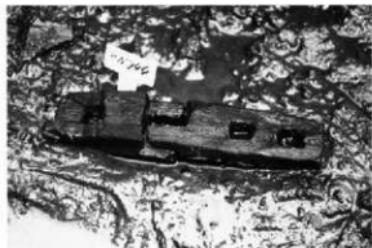
SG 6 墨書き土器(富)出土状況 (北東から)



SG 6 川底 須恵器出土状況 (南から)

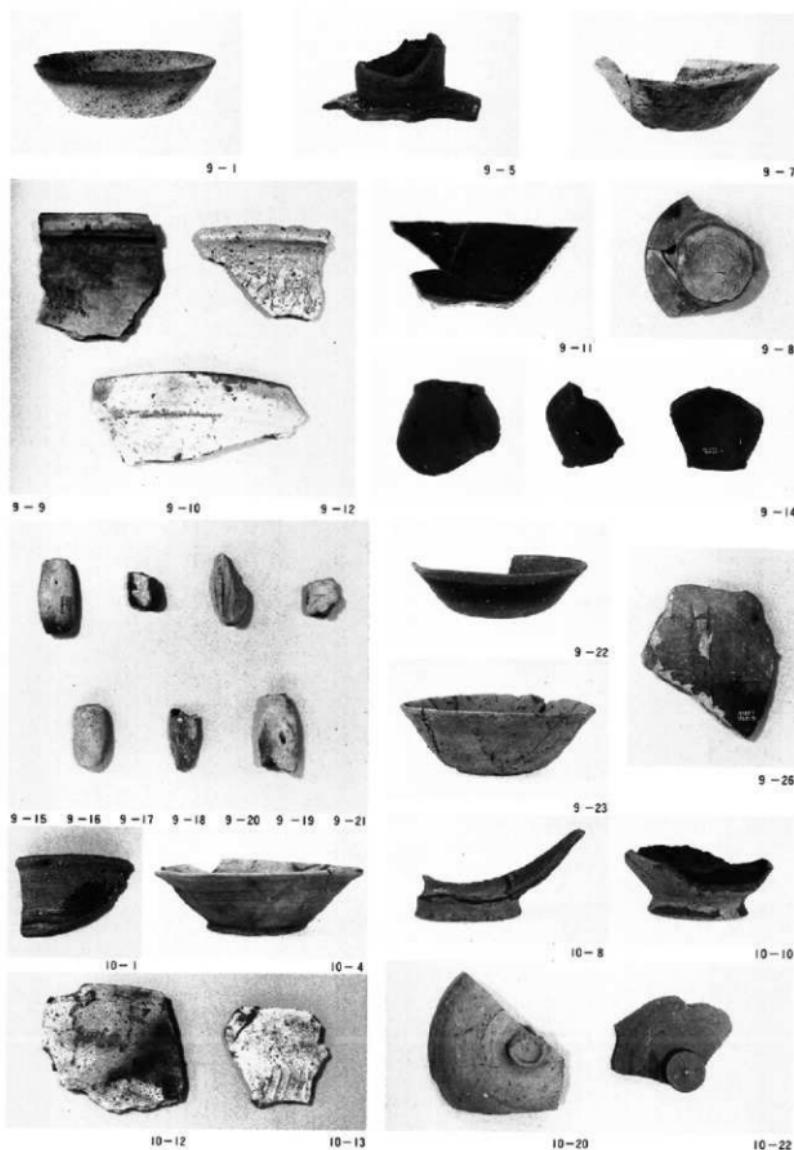


SG 6 川底 木製品出土状況 (南から)

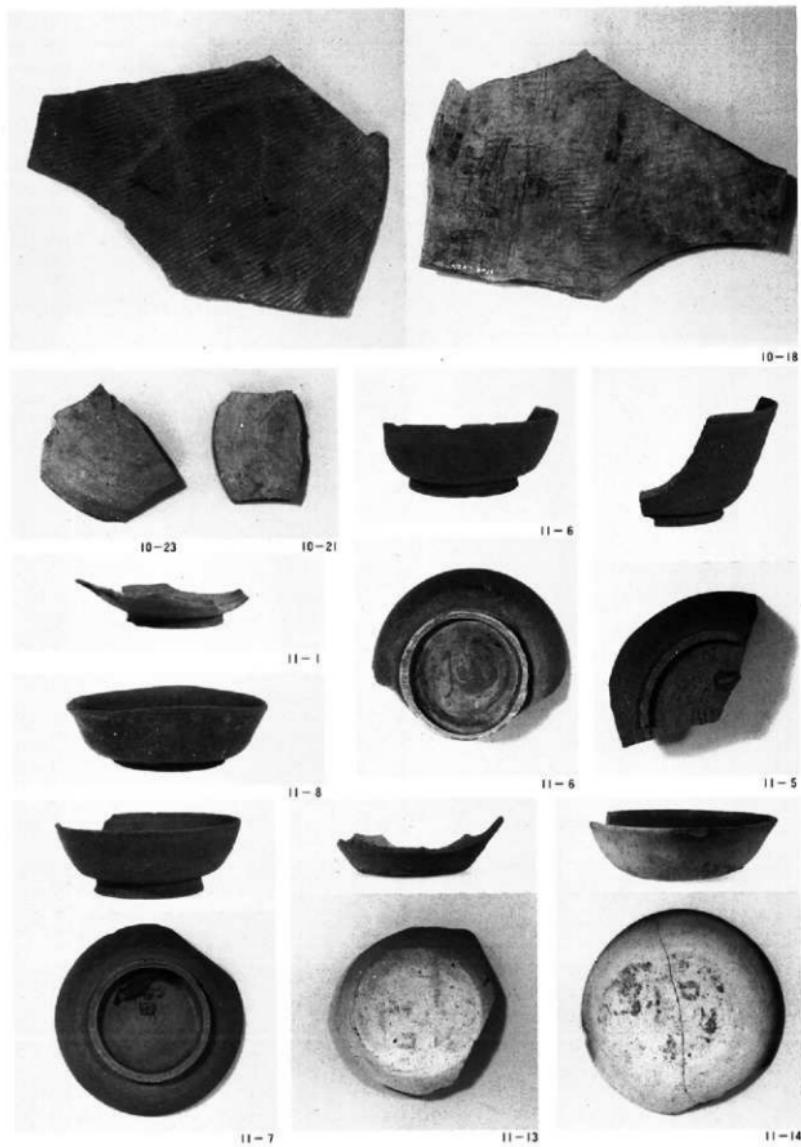


SG 6 川底 木製品出土状況 (南から)

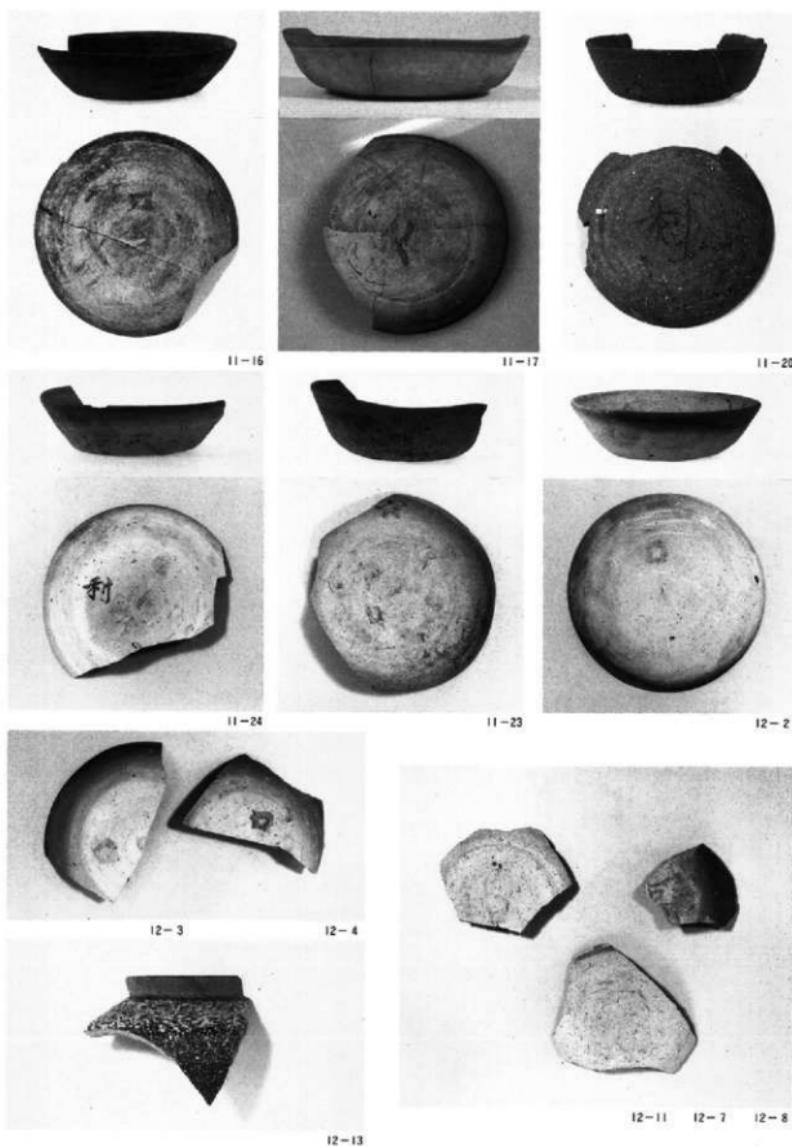
図版 7



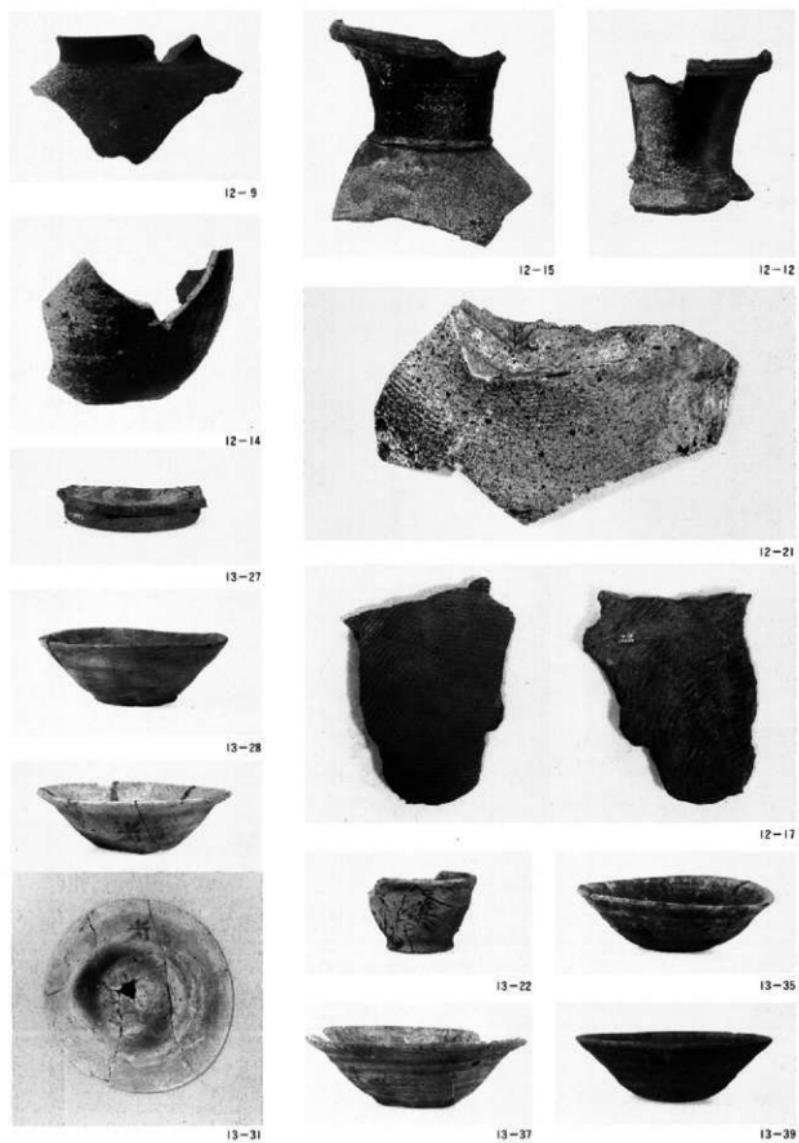
図版 8



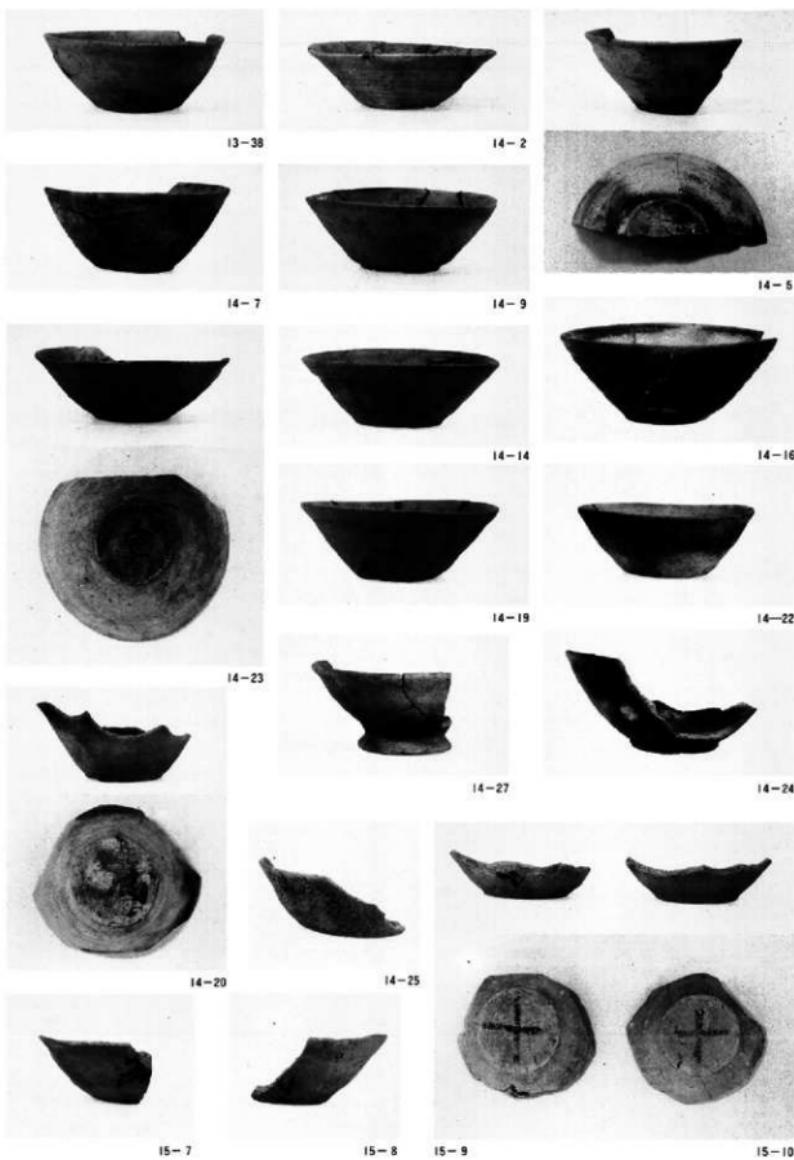
図版 9



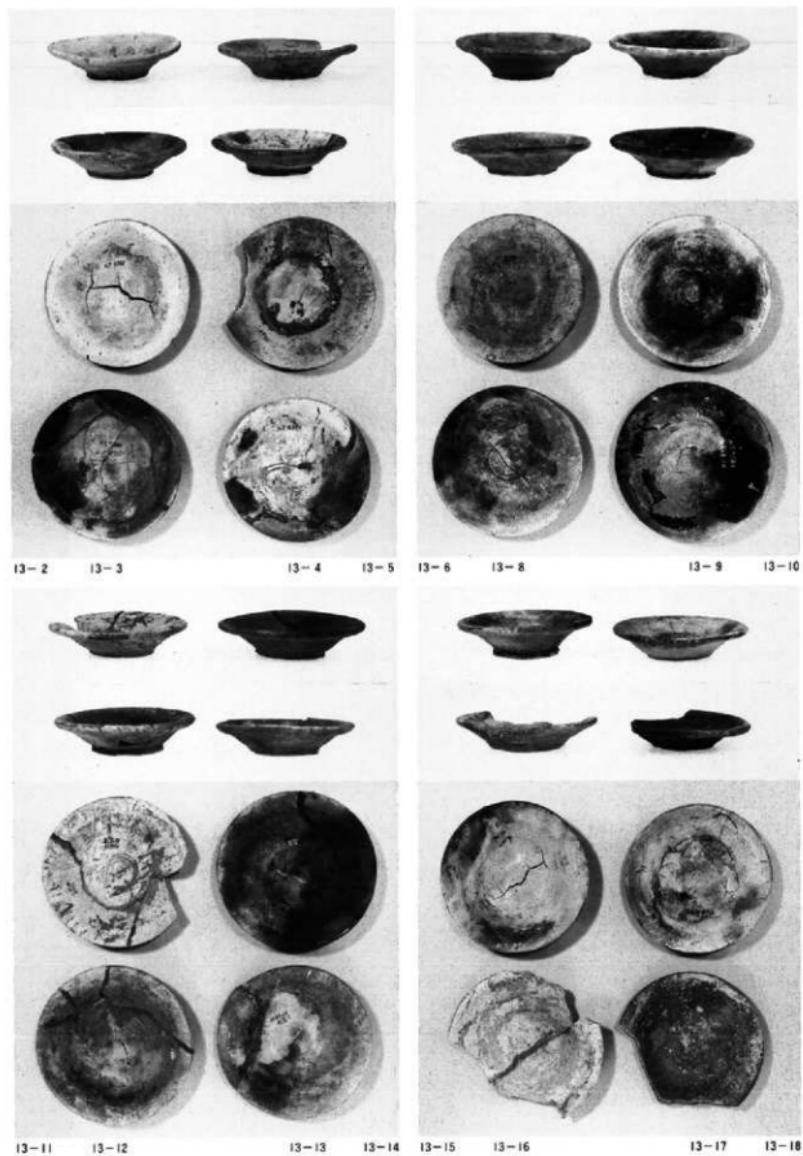
図版10



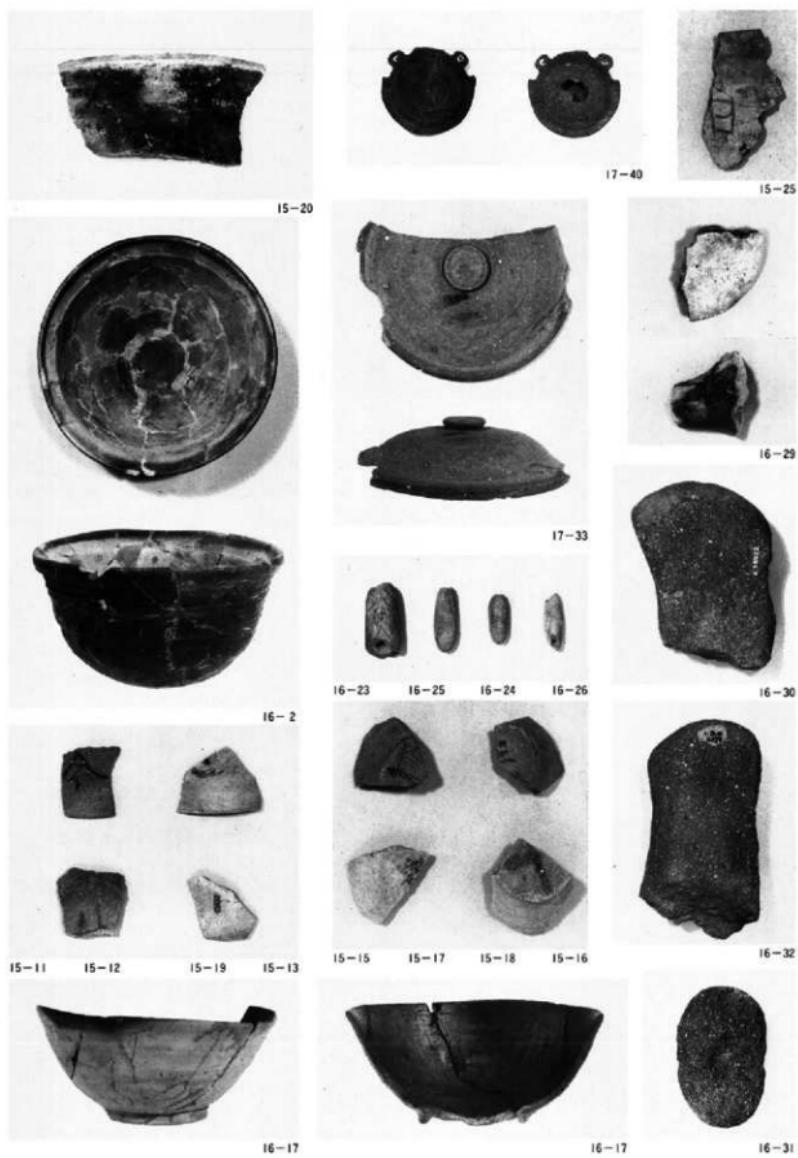
図版11



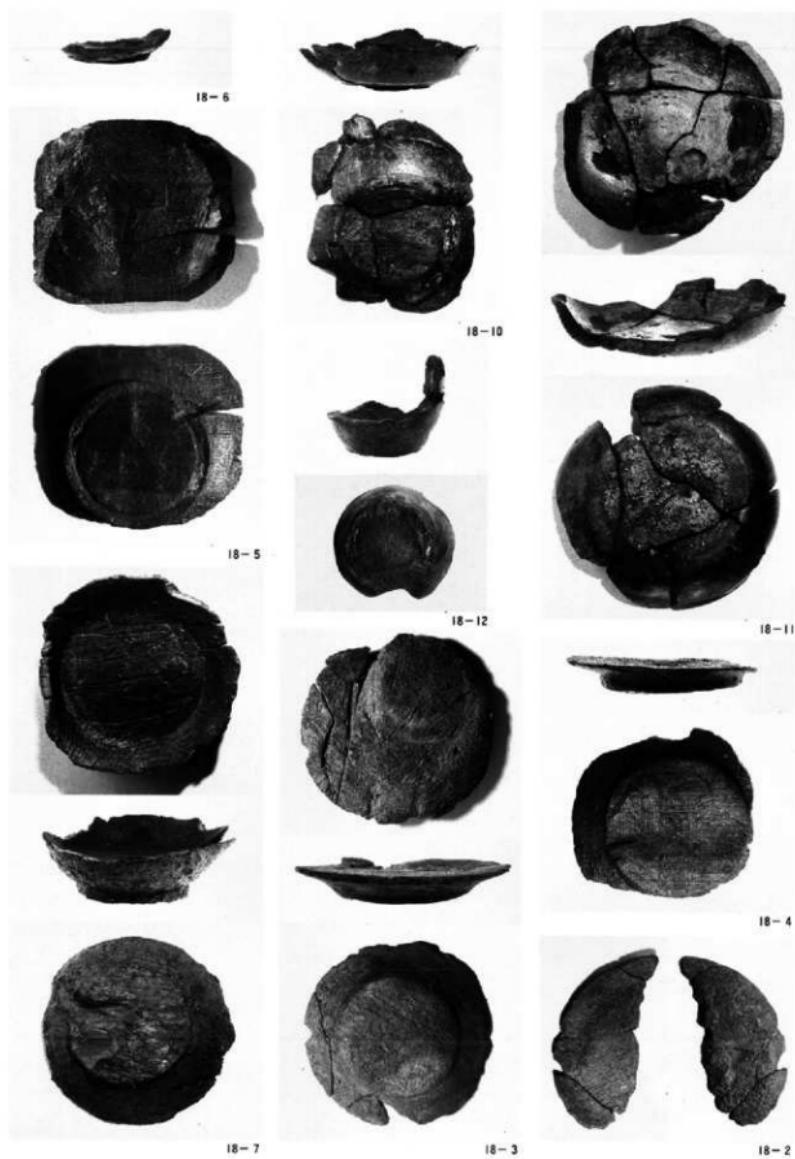
図版12



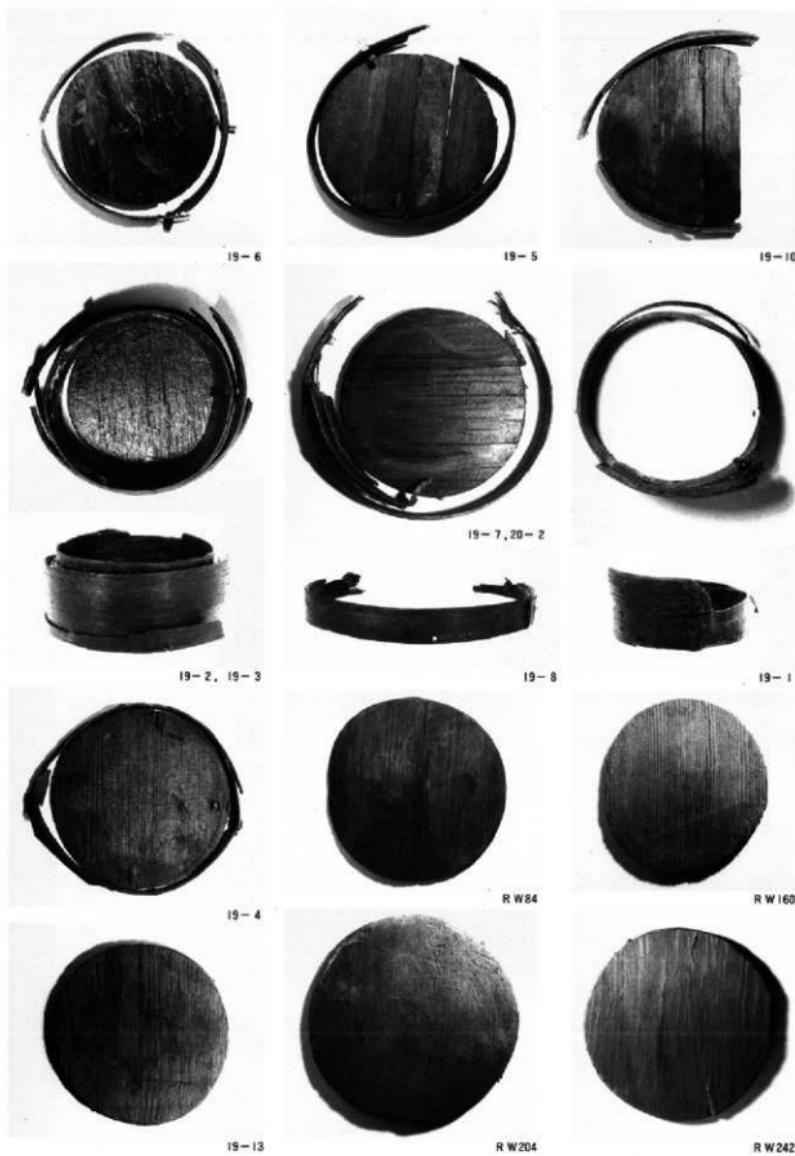
圖版13



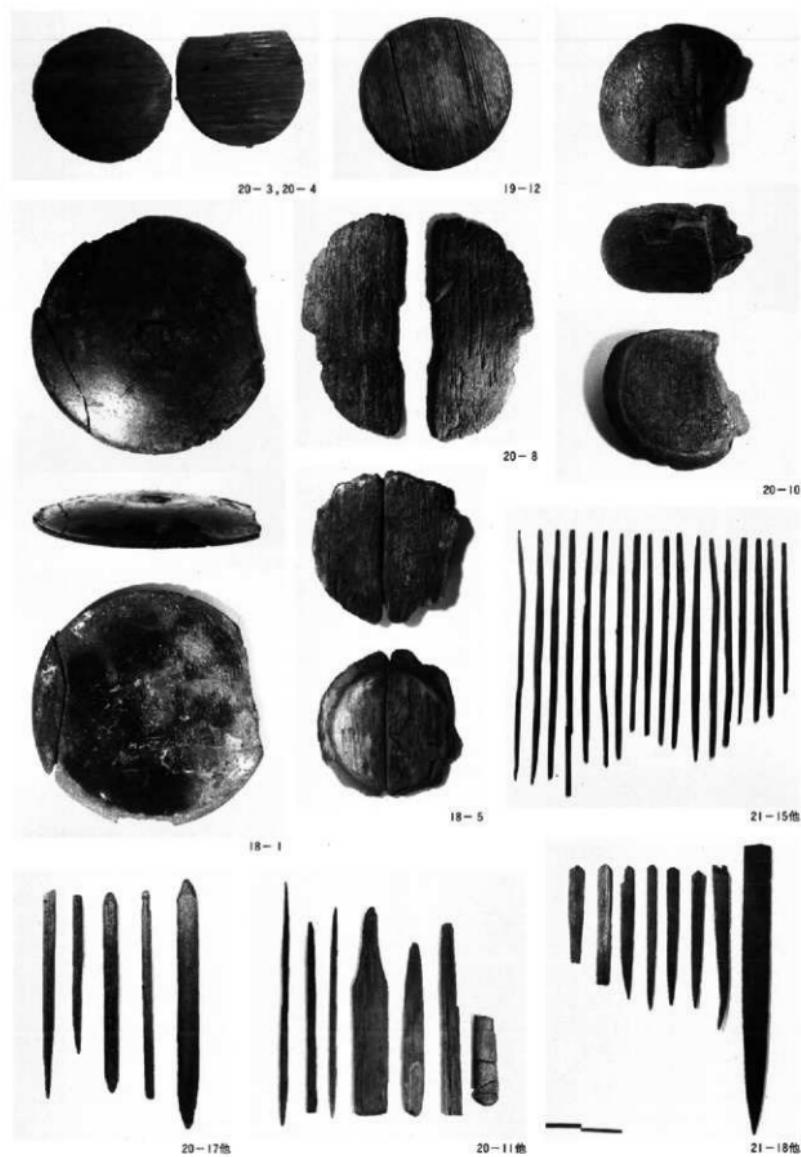
図版14



図版15



図版16



図版17



1T 全景(東から)



1T; SKI土層断面



6T; 柱穴群検出状況



3T; SX3 全景



3T; SX3 遺物出土状況

図版18



24- 1



24- 2



24- 3



24- 4



24- 5



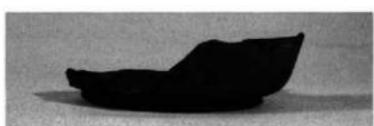
24- 7



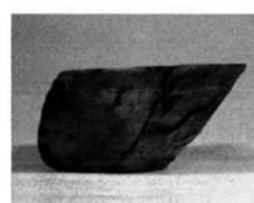
24- 8



24- 10



24- 9



24- 6



24- 11

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第25集

上高田遺跡・木戸下遺跡発掘調査報告書

平成7年3月25日 印刷

平成7年3月31日 発行

発行 山形県埋蔵文化財センター

印刷 大場印刷株式会社
